獣は死して皮を留め英雄は死して名を残す

篠江菴

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――――――でも、死なないで名を残せたならもっといいよね。

個性が世界を動かしている現代。一人の少女が英雄への夢を胸に最難関への扉を叩く。四ツ足獣は英雄たり得るのか？

初投稿です。更新はマイペースにぼちぼち行こうと思います。投稿期間が一月前後開くこともザラです。

目次

始まり
虎視眈々と ―― 1
いざ、 ―― 7
ふつうのおうち ―― 14
ひだまり ―― 20
親しみを込めて人は呼ぶ ―― 29
オリジン・1 ―― 39
オリジン・2 ―― 45
数学なんてクソくらえ ―― 56
門出 ―― 65
今日からヒーローアカデミア ―― 72

始まり
虎視眈々と

動物園に行ったことはあるだろうか？
家族や友達と行ったり学校の遠足なんかでも行ったりして、一度は行ったがある人が大多数だと思う。
世界の色んなところにいる動物が一度に見れて大人も子どもも皆楽しめる素敵な場所である。
もちろん、動物が閉じ込められているのが可哀想だと思う人もいるだろうしそのあり方が嫌いだって人もいるかもしれない。それでもその施設を作ったり動物達の世話をさたりしている人達は大切に動物達を慈しんでたくさんの人々にその良さを知ってもらいたいと思って毎日頑張ってると思うんだ。
動物達がすごす檻だって特別なガラスの水槽だって動物達や見に来る人々のことを考えて作ってある。

ここまでつらつら動物園について語ってきたけど私が言いたいことは一つ。

「いっぱんかていにちょうおおがたのおりってひかえめにいっていみわからないな???」

人は檻に入れるものではないって事だ。

＊＊＊＊＊＊＊

私は所謂転生者である。
私が前世のことを思い出したのは檻の中の私に両親がニッコニコの笑顔でごっつい首輪を着けている時だった。
首にかかったずっしりくる重みにびっくりすると同時に頭の中に

人一人分の記憶が丸々落っこちてきて当時は頭がおかしくなるかと思った。
でも目の前に両親が期待に満ちた目でこっちを見ているのが目に入って色んなことを飲み込んでニッコリ笑ってお礼を言ったのを覚えてる。
檻に入れられてて首輪つけられて着けた本人にお礼言うってメチャメチャ頭沸いてんな～～～～??意味わかんねーな～～～???って思うだろ？私もそう思う。

そもそもなんで檻に入れられてるのかって？それは私の個性のせいである。
まず私の前世には個性なんてものはなかった。平々凡々な大学生だった私は日々勉強に勤しみバイトに追われ漫画やゲームで徹夜をしまくる日常を送っていた。
後半おかしいって??オタクなんてそんなもんだ。
そういや死因は？多分徹夜やらなんやらの無理が祟って過労死だ。睡眠って大事だね…。
前世のオタク生活の中で少年雑誌やらラノベなんかの色んなジャンルに漂っていた私からしてみたら個性についての理解なんて朝飯前だった。あっこれ進○ゼミでやった奴～～!!
なんで自分が転生してるのかさっぱりわからなかったがそんなことよりも自分が個性なんてスーパーな能力を持っていることの方が気になり過ぎてそんなことどーーーーでもよかった！
だって言うなれば超能力じゃん!?　あんな漫画やこんなゲームに出てきたような一度は夢見るスーパーパゥワーじゃん??!??そりゃ興奮するよね!!!現在それのせいで檻に入ってるんですが!!!!!!

閑話休題。

私の個性の話である。
私の個性は四本足の動物になれる個性だ。３歳の時に当時動物が

大好きでビデオに映った動物に大興奮して上がったテンションのままにその動物そっくりに変身して見せたのが私の個性の発現だった。
まだ前世を思い出してなかった私は自分の姿を見てメチャメチャ喜んだらしいが、両親は私とは違う方向に喜んだらしい。
「家じゃ飼えない生き物をこっそり飼えるんじゃないか？」と。
娘の個性が発現したのに喜ぶ前にそれってどうなん??
後から知ったが両親は大の動物好きらしい。それがきっかけで結婚した程。夢は外国のお家みたいに（偏見）家の中で大型動物を買うことだったそうだ。
私の個性は物を変形させる父の個性と好きな動物一種類だけに変身できる母の個性のハイブリッドだ。
母の一種類だけという縛りが父の変形で無くなったのか四本足の歩く動物にならなんにでもなれるのだ。爬虫類系なんかもいけるか？と思ったが獣って感じの動物だけらしい。地味な縛りである。
とにかくそんな夢を抱いていた両親の元にお誂え向きな個性が転がり込んできたのである。どうするかって？当然利用するよね!!倫理観とは???
最初はよかった。動物の映像や図鑑等をたくさん見せられて「○○になってみせて～」と言われて上手にできたら誉めてもらえる。
これで純粋な幼女が喜ばない訳がないだろう？
誉められるままに練習してなれる動物が増えてきて、４歳の誕生日がくると「今日からあなただけの部屋があるのよ～」と連れてこられた部屋は全体のほとんどが檻に締められた部屋だった。
それが私の檻生活の始まりである。

＊＊＊＊＊＊＊

「七伽、今日は鹿になって見せて？この間買った絵本にのってたでしょう？」
「はい、ママ」

とろけそうな笑顔で私にオネガイをしてくる母親の言葉に従って白毛の鹿に姿を変える。

「今日も上手に出来たわね！素敵だわ!!でも本物の色になれたらもっともっと素敵なのに……!!!」

「ありがとうママ。でもこの白い毛並みも綺麗でしょう？」

「そうね……！この白い色が美しいんだものね……!!今日も素敵よ七伽!!!」

たっぷり一時間檻越しに私を眺め回した母親は満足したのか部屋の入り口に鍵をかけて退出していった。

その姿を見てソッと息を吐いて変身を解いた。

ハァイ！私檻暮らしのシチカッティ!!

今、今日の日課を迫られてたの!!!

……語呂悪いな？

前世はオタクの大学生、今世は動物七変化な個性有りの幼女、四葦七伽。現在7歳である。

名前は前世と漢字は違うけど響きは一緒なのですぐ慣れた。

檻と言う名のマイルームを与えられてから早3年。

幼いなりにヤバいと思った私は頑張った。記憶が戻った後の私からしても頑張ってた。最初は状況のわからなさにギャン泣きしていたがだんだん笑ってごまかすことを覚えた。笑って言うとおりにしていれば今まで通りに誉めて貰える、檻から出して貰えるかも！と思って頑張っていた。

けれど、頑張ったって所詮個性が発現したての幼女である。変身は安定せずに要望通りに変身できないことは多々あった。

幸いなことに我が両親は上手くできないからといって暴力に走る人ではなかった。

ただできないとできるまでご飯抜きの罰が待っていた。立派な虐待です。本当にありがとうございました！

最長で3日水だけしか与えられず意識が朦朧とする中でどうにか変身をやりとげた後は状況は改善したけれど、度々ご飯抜きは実行されていた。

それから私がなる動物は全部体の色が白っぽくなってしまう。これは私の髪が白いからじゃないかと思うんだけど、他の色になれるか何度も何度も挑戦して、それでもできなくって両親にはとっても惜しまれてそこのところは諦めてもらえた。やっぱりできない間はご飯抜きでした。

恨むなら遺伝したと思われる白っぽい自分の髪を恨めよ父よ。

未だに未練があるのか日課の度に毛色について言われるのはうんざりする。

やっぱりさ、これって事案では???

こんな家、絶対脱走してやるからな!!!!

幼女の中に元大学生の私がＩＮしてからは固い意思を胸に、日々の親から出されるオネガイをクリアしつつ体を鍛え知識を溜め込みイメトレをしまくった。

体力がないと脱走してもすぐに捕まっちゃうし、そもそも力がないと部屋の檻を破って逃げられない。

この部屋の檻は棒の隙間を抜けられないように目が細かい金網が張ってあるから逃げるときはこれをぶち破って逃げるつもりだ。

その為に与えられる色んな動物の図鑑から使えそうな動物を探し、変身するためのイメージトレーニングを重ねてる。

「もんだいはなにになってとっぱするか……」

力自慢の動物を考えるのが難しい。だってなれる動物にも縛りがあるのだ。

腕力で檻の棒を曲げられそうなゴリラには変身ができないし、犬猫系の動物だと突進力が足りなさそう…。ゾウなんかは流石に重すぎて逃げる前に床が抜けそうだし……。

人の姿に戻って図鑑をパラパラ捲って候補を探す。

この部屋にはたくさん与えられている図鑑や絵本の他には動物の映像を見るためだけのテレビしか情報源はない。

字を自分で読めるように平仮名と片仮名は教えてもらったが、それだけだ。

今の体は7歳だ。檻暮らしで学校には行ってないからそれ以上のことはわからないのだ。

多分両親は私に情報を与えたくないんだと思う。両親の中では私は「娘」じゃなくて「ペット」だから。

ペットは話さないし人間みたいに考えない。

でも自分で図鑑が読めてもらわないと困るから最低限の文字だけは教える、そんな感じなのだろう。

だけど、体は7歳でも中身は大学生だ。

前を思い出した私は漢字だって外国語だって読めるし、親の思い通りにはならないのである。

何度も読んだ図鑑の1ページで手を止める。

「あっこれはいけるかも……！」

少しずつ作戦を練りながら虎視眈々と脱走できる機会を窺っている。

いざ、

脱走計画が整った。後は行動するだけである。

あれから色々作戦を立ててみたけど、難しく考えるのは止めた。結局のところ、檻から出る、逃げるの２つができればいいのだ。シンプルイズベストっていいよね。

機会を窺い始めてからしばらく、チャンスは案外早くやって来た。父親が出張で長期で家を開けることになったらしい。両親と私の３人で暮らしているこの家には他に人はいない。父親がいなくなるならこの家に残るのは私と母親だけになる。このチャンスを逃す訳ない…！

父親が出かける前の晩。父親は私の部屋にやってきていつものように動物になるようにオネガイしてきた。

父親が好きなのはライオンである。要求されてなる機会が一番多い。

私は父親の目が嫌いだ。

顔は人の良さそうな表情で微笑んでいるくせに、目の奥が笑っていない。動物になれるから野生の勘でも働くのか、嫌な感じがして胸騒ぎがする。

多分変身ができないとご飯抜きにされてたのも指示を出したのは父親だろう。それに従う母も母だが。

個性が出る前の記憶からすると、前は普通のお父さんという感じだったのに。

今は人を人だと思っていないような……、

「七伽。なにか考え事でもしてるのかい？」

ゾッとした。

笑っているのに父の顔の中で目だけがギラギラと輝いていた。

頭では落ち着いてボロを出さないようにと思うのに、勝手に全身の

毛が逆立って尻尾が足の間に入ってしまう。
こんなの普通の子どもだったらギャン泣きしてしまいそうだ。
「な、なにも！パパがおでかけしちゃうならさびしくなるなっておもってただけだよ！」
「そうか、パパもママや七伽にしばらく会えなくなるから寂しいよ」
「はやくかえってきてね！」
「そうだね。お土産も買ってくるよ」

少し話して満足したのか父親が踵を返して入り口に向かって歩いていく。
早くでていかないかな、とその背中から視線を外さずにジリジリしていると、ドアに手をかけた父親がふと足を止めた。

「七伽」
「イイコにしてるんだよ」

パタン。ガチャリ。
コツコツ…と遠くの方へ足音が遠ざかっていく。
その音が完全に聞こえなくなると同時に体が床に崩れ落ちた。ライオンの姿のままだけど震えが止まらない。
怖かった。
思うことはそれだけだ。
変身が上手くできなくてご飯を抜かされていた時よりもずっと怖い。
脱走しようとしているのがバレたのかとも思った。本当にそうなら失敗した時が不味い。ご飯抜きなんて罰じゃ済まないだろう。
でも。
こんなところにずっといるのは嫌だ。

せっかく個性なんてものがあって新しい人生を歩んでいるんだから色んなことがしてみたい。
だから、

「あしたけっこうだ…!!」

絶対に成功させる。

＊＊＊＊＊＊

吾が輩は猫である。名前はもうある。
現在猫になって変身の練習を装って索敵中だ。
猫ってすごい。元々が狩猟生物だったのもあってとっても耳がいい。人間には聞こえない音がたくさん聞こえてくる。
昨日の今日でなにかあるんじゃ…？と警戒していた父親は朝からちゃんと出かけて行った。猫の聴力でいつも聞いて覚えていた車の音がでていくのをしっかり確認している。
朝食を運んできた母親も普段と様子は変わらなかった。その事に胸を撫で下ろす。
もうすぐ昼になる。母親が昼食を運びにきた時が計画の実行の時だ。
檻を破った後ならドアを破るのも簡単じゃないかと思うけど、昨日の父親を見た後だ。何があるかわからないから体力をできるだけ温存するようにして、外から鍵を開けられた時に突破した方がいい。
そこからはぶっつけ本番だ!!
足音が近づいてくる。部屋の前で止まって鍵を開ける音が鳴る。
ドアを開けて母親が部屋に入ってくる。

「七伽、お昼ご飯よ」

一歩二歩、三歩……、

今!!!

「う、ァ、あああ!!!」

メキメキと音をたてて体が変化する。こんなに大きな動物になったことがないから音が鳴る程の変化に体が軋んでいるみたいだ。

今までは変身の度に勝手に大きさが変わっていた首輪はあまりに急激な大きさの変化に耐えられず千切れそう。

変化が収まって形になったのは長さのある太い角。体つきはゴツゴツしていかにも固そうだ。

私が檻を壊すのに選んだのはサイだった。

「ブォオオオオ!!!!!!」

ガイイイインン!!!!

「きゃああ!!」

狭くなった檻の中で思いっきり勢いをつけて檻にぶつかる。２ｔ超の重さが檻にかかって頑丈な棒がひしゃげた。でもまだ足りない……！足りないのなら、何度でも!!

ガン、ゴンと激しく檻にぶつかりにいく。何度目かで瓦礫を撒き散らしながら檻が壊れた。

檻の外で頭を抱えて踞っていた母親の側を走り抜けて鍵の開いた入り口を勢いのままにぶち破る。

久しぶりに見た家の中は昔と変わらず、その事実にホッとしながら玄関を目指した。

「ま、待ちなさい！七伽!!」

後ろから聞こえてきた声は聞こえなかった振りをした。

＊＊＊＊＊＊

「、……はあ、ハッ……っ」

自宅から遠く離れた公園の遊具の中に身を潜めてから少し経つ。

あの後サイのままだと動きづらくて虎に変身し直して家から脱走した。ついでとばかりに玄関の扉も全力の体当たりでぶっ飛ばしたのは私です。

我が家の異変を不審に思ったのか自分の家から様子を見に出て来ていた人もいて、私が通り抜けた後は騒ぎになっていた。

なんせ虎だ。近所から変な音がすると思って見てみたら虎が出て来たりなんかしたらこの個性が存在する社会でも誰だってビビる。

虎になった理由は??パッと思い付いた動物がこれだっただけで特に意味はない。…そういや初っぱなから虎が警察に追われてるようなアニメを見たような……。意味はないったらない！

騒がせてすみません…！でも私の通報ついでにうちの家の異常にも気づいてくれ!!

檻生活をしていた時によく考えていたことは脱走方法の他に脱走した後のことだった。

中身は大人が入っていたって体は七歳。一人で社会の中で生きていくのは到底無理だ。

犬や猫になって野生で生きるのはごめん被る。

じゃあどうするか。警察で保護してもらえばいいじゃん。

情報が制限されていたからよくわからないけど、警察かそれに準ずる組織くらいあるだろ！

前世でも猿が町に出て来ただけでも大捕物があったくらいだから、絶対どこかが動くはず…！

捕まるときに麻酔銃くらい撃たれるかも知れないけどこっちが猛

獣になってるんだからそればっかりは仕方ない（白目）
でもちょっと計画が狂ってしまった。
サイに変身した時に想像以上に体力を持ってかれてしまったのだ。
私の変身は一度変身すると自分で変身を解かない限りずっとその姿を維持していられる。その姿でいること事態にはエネルギーを使わないのだ。
変身する時が一番エネルギーを消費する。その消費量は変身する対象が大きくなるにつれて多くなる。初めて変身する動物なんかは慣れてないから尚更だ。
後、結構ボロボロだったりするのだ、実は。
檻を壊す時の体当たりで打撲と擦り傷まみれだし、額は瓦礫で切ってしまった。
オデノカラダハボドボドダ…！
だから作戦を変更して近くの公園の草むらで変身し慣れていて体力の消耗が少ない猫に姿を変えて、今いる公園まで逃げてきた。ほとんど繊維だけで繋がっていた首輪もそこに置いてきた。

「……にぁ、」

動物の姿でこんなに疲れきってると人の言葉がしゃべれなくなるなんて初めて知った。
まあ元々動物の声帯で言葉を喋れる時点で個性の力ってすげー!!って感じだったんだけど。
ちょっと休憩、と思って寝転がった遊具の冷たさが走り回って火照った体にじわじわ広がっていく。ひんやりして気持ちよくて、もう起き上がれる気がしなかった。

「（ちょっとだけ、ねてもいいかな……？）」

くたくたになった体を自分を守るように小さく丸める。
ちょっとだけ、ちょっとだけ……と思っているうちに、もう半分も

目が開かなくなった。

「お前、大丈夫か？」

目が閉じきる前にキレイな赤色が見えた気がした。

ふつうのおうち

なんだか、いい匂いがする…。

「にゃ」

ふと目を開けるとぼんやりと周りの様子が見えてくる。
私は柔らかいタオルに包まれてダンボール箱の中に寝かされていたみたいだ。半分蓋が被せてあって明るすぎなくって今の私にはちょうどいい。
逃げる途中で薄汚れていた体も拭いてもらったのか汚れが落ちてさっぱりしていたし、傷だらけの体も手当てしてあった。まだ回復しきってないのか言葉は出ないけど。

「あっ！目が覚めたのか!?」

軽い足音が聞こえてきて頭上が明るくなる。ちょっとまぶしい…。
見上げると赤い目をした黒髪の男の子がこちらを覗き込んでいた。大きな目がかわいらしい。

「お前、公園で寝てたんだぞ！覚えてるか～？なんか怪我してるみたいだったからうちに連れてきたんだ！」

ま、まぶしい…！
拾ってきた猫（私）が起きたのが嬉しいのかニッコニコの笑顔が光輝いてる…！
私がたじたじになっている内に箱の中にスルッと手を入れてタオルごと持ち上げられる。思わぬ早業に警戒する暇もなかったわ…。
警戒はしなくても緊張はする。
…前世を思い出してから今まで、ほとんど人と触れ合ったことはない。個性が出る前までは家族らしい触れ合いがあったけど、個性が出

て檻に入れられてからは両親から触られたことはほとんどなかった。あっても必要最低限だけ。
多分自分たちが要求するのが所謂猛獣と呼ばれる生き物ばかりだったから私がその姿で反抗するかもしれないって考えていたんだろう。そう思うなら檻に入れたりしなきゃいいのにね。
そのせいか人に触られる感覚っていうのがいまいち思い出せなくてドキドキするのだ、悪い意味で。
自分の手の中で細長い体が固まったのがタオル越しでもわかったのだろう。赤い目がじいっとこちらを見つめてくる。私も目を見開いて見つめ返す。
しばらく見つめ合って、相手も緊張しているのが伝わってきて、瞳の中に私を傷つけようとする意思を感じないのを認めてやっと瞬きをした。体の力が抜けてダラーンと垂れ下がる。向こうも私が落ち着いたのがわかったのかふう、と大きく息を吐き出していた。
猫的には瞬きって挨拶らしいって言うのをちらっと聞いたことがあるけど、なんかこう、大丈夫だよ！って感じ伝わっただろうか…！
向こうも気が抜けたみたいだし大丈夫そうだな??

「体ガチッってなったからびっくりした…。おどろかせてごめんな！」
「にゃおん…」

そりゃいきなり抱き上げられたらビックリするだろうよ…。
腕が疲れてきたのか抱っこの形に抱き直されて腕の中に収まる。ちょっと重そうにしながらもどこかに向かって移動が始まった。

「かーちゃーん！猫、起きたー！」
「あら本当ー？連れておいでー」

男の子のお母さんだろうか、優しい声がする。
着いた先で待っていたのは男の子と面影が似た優しそうな女の人

だった。
あったかくておいしそうな匂いが鼻をくすぐる。
「元気になったんだねぇ。お腹空いてるんじゃない？ご飯があるよ」
「かーちゃんおれも腹へった！」
「はいはい、あんたの分はこっちにあるよ」
「よっしゃあ！」

一緒に持ってきてあったタオルごと床に下ろされる。コトリ、と音をたてて目の前に置かれた平皿には牛乳が入れてあった。鼻先を近付けてみるとほんのり温かいのが伝わってくる。ペロリと舐めると甘い味が口一杯に広がってお腹がきゅう、と鳴った。
「あの子が拾ってきた時は傷だらけでどうしようかと思ったけど安心したよ。たくさん食べていいからね」

一心不乱に牛乳を舐める私の背中を温かい手が滑っていく。
動物の体だと涙は出ないけど、泣きたくなるほどおいしいごはんの味だった。

＊＊＊＊＊＊

お腹がいっぱいになって男の子にちょっとだけ遊んで貰って今は抱っこされてテレビを見ている。
いや、警戒捨てすぎじゃね？このお家がヌクモリティに溢れてるからいけないんだぁ。今私はお猫様だからコロコロしちゃうもんね！
「おっ！オールマイトじゃん！また敵（ヴィラン）をやっつけたんだなー！」
ヴィランってなんだ？

聞きなれない単語が耳につく。テレビを見るとアメコミのスーパーマン見たいなデッカイ男の人がデカデカと映っていた。すげぇ、画風が違う…！

テレビを見ていると今まで知らなかった情報がたくさん頭に入ってくる。ヴィランってなんだ。ヒーローってなんだ？前の記憶になかったことがいっぱいだ。

その後見ていた番組でタイミングよくヒーロー関連の特集が始まって、私は新しく知ったヒーローについて詳しく知ることになった。

「わたしのこと、けいさつにれんらくしてもらえないですか？」

ヒタヒタと音をたてずに廊下を歩く。

赤い目の彼はもう寝てしまった。良い子は寝る時間である。ちなみに鋭児郎くんというらしい。彼のお母さんがそう呼んでいた。

私が向かった先はこの家の大人がいるところ、台所である。

見つけた鋭児郎くんのお母さんは机に紙を広げて何か書き物をしていた。突然足元に音もなくやってきた私に少し驚いた様子だった。それよりももっと、しゃべる猫に対して驚くことになるんだけどね。

「あなた喋れたの？」

「はい、だまっててすみません。つかれててしゃべれなくって…。けがのてあてとごはん、ありがとうございました」

「それは、大丈夫だけど……。それはあなたの個性なの？」

「そうです」

見せた方が早いかなと思って変身を解く。どんどん高くなってい

く目線にポカンと口を開けた彼女の姿が映る。
あっ私今服着てないじゃん。
ハッとした鋭児郎くんのお母さんの手によって慌てて近くにあった上着が被せられる。
そうだね。服着てないってヤバいよね。家だと変身の邪魔だったから病院の検査服みたいな簡易な服かいっそ着てないかっていう状態でした……。実家やば……。

「ちょっと!お風呂入るよ!!」

「えっ」

あの後一緒にお風呂に入って洗われて傷の手当てをされ直した。見苦しかったですよね!!本当にすみません…。
それから自分がどんな状況で猫になっていたのかを簡単に話した。実家のことは話していない。鋭児郎くんのお母さんも何か黙っていることがあるのはわかっているみたいだったけどそこまでは突っ込んでこなかった。
でも自分の子どものことじゃないのにすっごく心配された。
これがふつうの親なのかなと思ってちょっと鼻がツンとした。
警察に連絡してもらってちょっと私も交渉させてもらって、明日の朝に迎えに来てもらえることになった。
また猫の姿になって鋭児郎くんのお母さんの部屋のソファーで、かけてもらったタオルケットにくるまって丸くなる。（人間姿で寝て欲しいお母さんＶＳ猫に戻って最初に寝ていたダンボールでＯＫな私で戦争が起きるところだった。妥協案である。）

「ふつうのおうちってこんなかんじなのかなあ」

じわりじわりと体の中に温かいものが溢れてくる。
久しぶりに感じた気持ちが瞳からこぼれ落ちてしまいそうで
ぎゅっと強く目を閉じた。

ひだまり

＊＊＊＊＊＊＊

《ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ》

止まった車から降りて目の前の一軒家を眺める。昨日通報があった家だ。

ーーーー昨日の昼過ぎに起こった騒動。住宅から虎が脱走したなんて通報があった。本当に虎が一般家庭から出てきたのか、個性によるものじゃないのか。本当の所はわからないが、近隣から同じような通報が何件も寄せられたこともあり、近場のヒーローや警察が駆けつけて捜査が始まった。

虎の方の捜索は難航した。住宅から一番近くの公園に飛び込んでからその後の足取りが掴めない。十分に警戒しながら公園中を捜索した所、草むらの中から千切れた首輪だけが見つかった。通報した民間人からの情報の中に首輪をしていた話もあった為これが該当品だろう。

後、公園の入り口から首輪がある辺りまでは大きなものに踏み荒らされたような跡があるのにそこから先には小型の動物くらいの小さな足跡しか見つかっていない。

他に不審な点は無く、この事からヒーローと警察は十中八九本物の虎じゃなく個性を持った人間によるものだろうと判断した。

一方で虎が出てきた住宅の方では気分が悪くなるような実情がわかった。家の中で実の両親が娘を監禁してペットとして飼っていたらしい。娘は色んな動物になれる個性で、それに目をつけた両親が外にも出さず檻の中に閉じ込めて動物になるように強要していたようだ。監禁するにあたって、近隣の住民には他県に行かせたい学校があったから今からその近くに住んでる親戚に預けている、今の仕事が

一段落したら自分たちもそちらに移る、と言って丸め込んでいたらしい。
それまでは両親と共に見かけていた子どもの姿を見なくなって、もう丸3年は経つそうだった。
家に踏み込んだ警察が檻の残骸が飛び散った部屋で呆然としていた母親から聞き出してわかった事だ。
ヒーローや警察がきたことが分かって観念したのか自分から色んな事を喋っていた。今も警察署の方で取り調べが行われている。
朝から出かけて行ったという父親は行方がしれず、現在捜索中だ。
そして未だ見つからない虎の捜索につながる情報が、母親への取り調べ中に出てきた。
子どもについて聞くと”娘は白い色にしかなれない”と言ったそうだ。
何件も来ていた通報でも共通して、皆口を揃えて「”白い”虎だった」と言っていた。
これによって情報がつながり、白い動物になっているはず女の子を捜索する事に決まった。
首輪が見つかった公園に残されていた小さな足跡。虎の姿が一向に見つからない以上、他の動物になっていると考えて動いた方が合理的だ。
俺に出動要請が来たのはこの段階で、胸糞悪い事を考える奴もいるもんだ、と思ったもんだ。
もうすぐ深夜に差し掛かる頃だった。捜査本部とされていた場所に警察から一本の電話が回されてきた。
白い猫に変身できる女の子を保護しています、と。
周りにも音が聞こえるようにされた電話の内容を聞いてその場にいる全員に緊張が走る。
若い女性の声で、息子が拾ってきた猫が個性で変身した女の子だったこと、保護してからの様子、体の状態等の情報が語られる。変身を解いてくれて見せてくれた体は傷だらけだったと震える声で話され、眉間に深く皺が寄った。

「こんばんは」

電話口の声が変わった。さっきの女性よりも高い、女の子の声。

「めいわくをかけてごめんなさい。…よあししちかです。」

四葦七伽。今捜索されている白い動物に変身できる女の子の名前だ。

本人で確定だろう少女が自分が保護された状況、保護された家から動く気がないこと、朝まで保護は待って欲しい事を淡々と話していく。しゃべり方は舌足らずだが内容はしっかりしている…。今何歳なんだ？

「なぜ明日の朝なんだい？…我々としてはすぐにでも迎えにいってもいいんだけど……」

電話の対応をしている警察官が柔らかい言葉でいう。聞いているこちらとしては勝手なことをいう子どもに少し苛立つ。もうすぐ深夜だが相手は虎になれる。保護している家庭の安全の為にも早急な保護が求められるだろう。一人の為にたくさんの人員が動いていたんだぞ…？

だが受話器から聞こえてきてくる少女の必死な声を聞いて自分勝手な要求だとささくれだっていた気持ちが萎んでいく。

「わたしをたすけてくれたこにもはなしをきいたりするんでしょ…？」

「おとながねてるこどもをおこしてまではなしをきくの？」

「わたしはここからにげないしなにもしたりしない…！」

「だから、もうすこしだけここにいさせてほしいの…!!」

保護されてから心を開くのがやけに早いなと思った。まだ半日も経っていないのにこの様子……。幼い喋りの子どもだが何か良くないことを考えているんじゃないかと疑っていたが。

うっすらとトゲを感じさせる言葉と声色ににじむ羨望。

これはーーーーー、

少女の過去を考えれば人に優しくされたのは数年ぶりだっただろう。同年代の子どもと触れ合ったことがあるのかどうかもわからない。自分が与えられなかったものが目の前にある状況はどんなものだろうか。

自分が望んで作った状況だったはずなのに、突然目の前に転がってきた自分が欲しかったものから離れがたい思いは痛いほど伝わってきた。

結局保護は明朝行う事になった。捜索をしていた人員は父親を追っているチームを除き引き上げる。

一部のメンバーは秘密裏に少女が保護されている住宅に様子を見にいった。

俺達ヒーローは明日の保護に向けて準備を進めていく。

＊＊＊＊＊＊＊

「なー…、ほんとにいっちゃうのか？」

「にゃ」

「もっとうちにいればよかったのによー…」

鋭児郎くんがしょんぼりしてる。

黒髪から覗く眉毛がハの字に垂れていてなんだか申し訳なくなっ

た。
今この家には私を保護しにヒーロー達がやってきている。昨日の電話で打合せして迷い猫を保護しにやってきた、という体で回収してもらうことになったのだ。呼び鈴を鳴らしてやってきたのが多分私服の警察官とモサッとした髪の小汚ない男の人だったのは驚いたけど。出会い頭にヒーローと言われなかったら気づかなかった。
最初に猫の姿でちらっと顔合わせをしてから、今は隣室で鋭児郎くんのお母さんと話をしている。
朝、起きてきた鋭児郎くんに私を迎えにヒーローがやってくることを鋭児郎くんのお母さんが話すと、それはもう、非難轟々だった。
昨日の夜の電話を迷い猫の届け出をしたと言うことにして話してもらったので、自分が寝ている間に勝手に決まってしまってそれが嫌だったらしい。
しばらく怒っていたけどお母さんに宥められてしぶしぶ納得していた。
でも諦めきれない所はあるようで、朝ご飯が終わってから私はずっと鋭児郎くんの膝の上に抱えられているのである。
モヤモヤしているのか意味のない言葉を吐き出しながら私のお腹に顔を押し付けてくる。く、くすぐった!?髪の毛わちゃくるぞ!
頭の位置に前足がきたのをいいことに爪を立てないようにしながら髪の毛をかき混ぜる。お日さまみたいないい匂いがしてちょっとだけ楽しくなった。
最初は「やめろよ!」とか言っていた鋭児郎くんもだんだんおかしくなってきたのかくふくふ笑っている。よかった、機嫌は直ったみたいだ。
ふと、体が持ち上がって鋭児郎くんと目が合う。私の後ろの窓から光が差し込んで白い毛並みがきらきら光る。
「お前の毛、きれいだなぁ」
そんなふうに純粋に言われたのは初めてかもしれない。

ポロっとこぼれ落ちた言葉が胸のなかに染み込んでいく。何気ない一言が心からの言葉だと伝わってきてなんだかくすぐったかった。
真っ赤な瞳が宝石みたいにキラキラして引き付けられる。

「あっそうだ！いいもの持ってきてやるよ！」

唐突に私を下ろすと近くにあった戸棚まで走って行って引き出しの中を漁り出す。探し物が見つからないのか中身をポンポン投げてるけど、これ後で片づけるんだよね…？
やっと見つかったのか「あった！」と手になにかを掴んで戻ってくる。手に握られていたのは真っ赤なリボン。
鋭児郎くんのお母さんが取っていたお菓子のラッピングの奴らしい。

「これ、お前にやるよ！」

するりと首にリボンをかけてくれて難しそうにしながらもリボン結びにしてくれる。
縦結びになっているのかちょっと傾いた羽が首をくすぐる。
「最近好きになったヒーローがいるんだ！すっごくカッコよくてアツいんだぜ!?そのヒーローと同じ色だから、お前にやる！」
「おれ、大きくなったらそのヒーローみたいになりたいんだ！だからそのリボンで約束だ！絶対なるから、元の家に帰ってもおれのこと忘れるなよ！」

約束かぁ……。
鋭児郎くんは私が本当は人間だってことを知らない。本物の猫だと思っている。猫の寿命は１６年くらい。鋭児郎くんがヒーローになるまで生きているかどうかわからない。そのことを知らないだろう子どもらしい約束だ。
でも私は人間だ。きっとずっと、今日の約束を忘れないだろう。

わしわしと頭を撫でてくれる手に了承の気持ちを込めてすり寄った。

＊＊＊＊＊＊＊

あれから鋭児郎くんも警察の人と話してからお別れとなった。家を出る前に鋭児郎くんのお母さんが鋭児郎くんとのツーショットを撮ってくれた。鋭児郎くんはやっぱりしょんぼりしていたけれど写るときはちゃんと笑ってくれた。ちなみに写真撮影の前に曲がったリボンは綺麗に整えてもらった。ありがとうございます。

リボンを整えて貰っている時に鋭児郎くんのお母さんとはこっそりお別れができた。謝罪とお礼を伝えると「元気でね」と頭を撫でてくれた。

「(あたたかかったな……)」

鋭児郎くんも鋭児郎くんのお母さんもひだまりみたいなあったかい匂いがする家だった。

鋭児郎くんのお母さんがくれたタオルケットにくるまりながら振り返る。

タオルケットは昨日寝るときに借りたのをそのまま持ってきている。服を着ていなかった私に、ちょうどいい服がないからと言って譲ってくれたのだ。確かにマントのように被れば十分に体を隠してくれるだろう。

今私が乗っている車は病院に向かっている。脱走の時にできた傷の治療をしたり体に異常がないか調べたりするんだろう。それから、警察からの事情聴取も。

「…大人が怖いか？」

布の向こうから声が降ってくる。頭まで覆っていたタオルケットからチラリと顔を覗かせると、ヒーローだと名乗った人がこちらを見ていた。

そりゃあ、怖いよ。どっちかっていうと人間怖いって感じだけど…。

でも思うところがあるんだよね。

「……おとなはかってだから」

望んでこの個性になったわけじゃないのに勝手に持て囃されて閉じ込められて、わからないだろって自分達の欲望を押し付けて、勝手なことをばっかりだ。

本当は。この体の女の子はそんな状況に耐えられなくて心が死んでしまったんじゃないかと思ったことがある。

怖い想像は風船みたいに大きくなって、本当はこの体が前世である私を思い出したんじゃなく、心が死んでしまって空っぽの体の中に代わりに私が入ってしまったんじゃないか…。そんなことまで考えたこともあった。

真相は誰にもわからないけど、頼るべき大人である両親に振り回されて心がすり減ってしまっていたのは事実だ。

でも鋭児郎くん達と会って両親みたいな人ばかりいる訳じゃないことを思い出した。きっと私を保護しに来てくれたこの人たちもあたたかいものを持った人達なんだろう。だから。

「……おとながそんな人ばっかりじゃないってしってる。

だから、生きるよ」

私を助けてくれたあのあたたかい家の人達に報いる為にも。

もしかしたら空っぽになってしまったのかもしれないこの体の子

が報われる為にも。
しっかり前を見据えて進むと、赤い目のあの子が約束だとくれたリボンに誓おう。

親しみを込めて人は呼ぶ

ーーーー鬱蒼とした森の中。張りつめた意識の隅でできる限り抑えた自分の呼吸音が耳を掠める。枝深い茂みに身を潜め周囲を確認してから深く息を吐き出した。

「まだまだじゃのう、七伽」

「……っ！」

頭上から降ってきた声に弾かれたように茂みを飛び出し、疲れた体を引きずって密集した木々の間を走り抜ける。

走っても走っても追いかけてくる人影に口汚く悪態をつきたくなるがそんな暇もなく足を動かし続けている。

チラリと後ろを確認しようとした時顔のすぐ横を黒っぽい物体が通りすぎていった。肌を刺していくチリチリとした鋭い風が本当に肌を裂いていったかと思った。

身の危険を感じて転がるように走るが一度始まったコレはしばらくは終わらない事をここ数ヶ月で私はよく知っている。

右に左に、時に木の影へ隠れながら黒っぽい物体ーー布に詰められた小豆であるーーを避けていくが投げられる数の多さに避けきれずに腕や足に細かい粒が痣を作っていく。

袋入りのマメくっそ痛い。っーかこれお手玉じゃん!!豪速球で投げても破れないお手玉ってなんだよ!?

鉛のような足が縺れるとおちょくるように的確に足に当ててきやがる…！

こんの……!!

「くっそジジイ!!足ばっか当てんな!!!」

「誰がジジイじゃ！爺様と呼べ!!」

「フギャッ!!」

勢いよく飛んできたお手玉が思わず振り向いて噛みついた私の額に良い音を鳴らしてぶつかった。

疲れていたのもあってか頭がグラリと揺れて意識がぶっ飛んだ。

あの日から早半年。

私は今、とある山奥で人外じみたジジイとババアに稽古をつけられながら人としての感覚を取り戻している最中である。

……動物に変身できるからって、野生への復帰訓練と間違ってないか？

＊＊＊＊＊＊

半年前。私は保護され、病院での精密検査を受けたり色々と調査を受けたりなんだりしてから今お世話になっている家に引き取られた。

母親は虐待で捕まり父親は蒸発して行方知れず。てっきり施設にでも預けられるのかと思っていたが、私には親戚がいたらしい。私が今まで住んでいた所からかなり離れた県にいたらしいが、私の親類を探してくれたらしい警察から連絡が回ってきて私を迎えに来てくれた。

実は両親が話していた、私を閉じ込めていたこと隠す為に近所についていた嘘をチラッと小耳に挟んで知っていたので、他県に親戚がいるって話も嘘だと思っていたのだ。まさか、実在するとは。

親戚は小さいお爺さんと大柄なお婆さんの2人組で、話を聞いて自分の事のように憤り、自分達には子どもがいないからと引き受けてくれた。

病院での検査では問題が浮上した。

私は保護された当時7歳になっていたんだが、育った環境のせいか成長が2歳ほど遅れていたらしい。2歳て。

多分原因は食事だ。最長3日間の断食生活の繰り返しに極端に偏った食生活が個性が発現してから続いていた。
個性によって私の味覚は変わってしまい、普通人間は食べられない生肉が食べられるようになった。きっかけは「動物になっているなら食べられるんじゃないか？」と生肉片手にやって来た父親だ。その日食べても異常がないことがわかってからは毎回の食事は生肉になった。今となってはそれに体が馴染んでしまったのか数日に一度は生肉を食べないと体に不調が出てしまう。
本来人間は肉を食べるだけでは生きていけない。色々な食材の中からたんぱく質だけじゃなく、脂質や糖質、ビタミン等色々な栄養をとらないと体に異常が出てくる。
それを私はたんぱく質しかとっていなかったのだ。生肉を食べられる体でも足りないものが多過ぎて成長不良に繋がったというわけだ。
これからちゃんと背が伸びるかわからないと言われて私はかなりへこんだ。
後は数年閉じ込められていた私のメンタルケアだ。今は家の近くにある大きな病院に定期的に通っている。

今の家は、小さい町の山の麓にある。後ろが山でその前に無駄に広い敷地の家が建っていて、引き取ってくれた2人はその家で格闘技を教えているらしい。ちなみに山は私有地だそうだ。稽古でよく使うらしい。
私が引き取られてからは、数年室内から出ずに鈍ってしまった体を叩き起こすかの如く稽古と称して体術を教えられている。なかなかにスパルタで全くトラウマを思い出してる暇はなかった。荒療治にも程がある。
そんなこともあり、最初は丁寧に読んでいた呼び方もあっという間に崩れ、ついでに口も悪くなった。

＊＊＊＊＊＊＊

「七伽、お箸の持ち方上手になったねぇ」
「みちがえた？」
「調子に乗るんじゃないよ。」
「えーー、いいじゃんちょっとくらい！」

平皿に乗った小豆を箸で持ってそっと隣の皿に移す。またつまみ、それも隣の皿へ。それを何度も繰り返す。

日本人なら皆小さい頃にやったことがあるだろうか。豆を使った箸の練習である。前世では無駄に皿の移し替え競争とかあった。

今世では手先の器用さがいまいちなので7歳にもなってお箸の練習である。理由は、わかるな…？とりあえず昔途中まで習ってた食事のマナーの練習は無駄になった。

じいちゃんとばあちゃんは生活の基礎からしてできないことだらけの私に色んなことを教えてくれる。箸の持ち方から言葉使い等わからないことはなんでもだ。前世の知識でしゃべれはしても舌っ足らずはなかなか直らず、短い指では大人のように上手に箸を持つのも難しかったのでとても助かっている。鉛筆は平仮名片仮名の練習してたから地味に持てるんだけどな～～。

義務教育である小学校は、編入しないで通信教育を受けながら足りない部分を道場の門下生にいる近くの学校の先生にちょっとずつ教えてもらっている。前世ではなかった小学校の通信教育があるのは個人的に嬉しい。個性があって前世よりも難しい問題とか多そうだから、色々とニーズに沿った末に今の形になったんだろう。

私がちまちま平皿の小豆を移し替えている間、横に座っているばあちゃんは黒い布を繕いながら小豆を詰めていた。

ばあちゃんはデカイ。座っていても大人が立っているくらいの高さがある。個性に由来する背の高さだけど、それに合わせて天井も高くしてあるくらいだから押して知るべしである。そんなばあちゃんが使う物は普通より大きくしてあるものもあるから、巨人の家に紛れ

込んだような気分になる。
　そんなばあちゃんによって完成したお手玉はソフトボールくらい大きくて最早違う物体だ。
　じいちゃんとばあちゃんは私に稽古をつけてくれるが、私が小さすぎるので（実質５歳）内容は結構ソフトにしてくれている。じいちゃんと鬼ごっこ、ばあちゃんと組み手、じいちゃんと投擲練習、ばあちゃんと筋トレ柔軟、ｅｔｃ……（※尚基本気絶までがセット）。あれ？やっぱりハードだな??
　でもまだソフトな方なのだ。道場の門下生の人達の訓練見るとな……。
　じいちゃんの鬼ごっこは足元が悪い山でする。反射神経や動体視力、体力を上げる稽古だから、走って逃げ回るだけじゃなく色んな物が飛んでくる。私はまだばあちゃん作のお手玉で手加減されているけど段階が上がってくるとこれが刃物になるらしい。クナイ、投げナイフ、棒手裏剣、チャクラム…。アサシン養成所かな???山からはよく悲鳴が聞こえてきます……南無。
　更に段階が上がるとじいちゃんが個性を使ってくるようになる。じいちゃんの個性はナマハゲだ。見た目がナマハゲになって身体能力が上がる。ナマハゲが森の中を追いかけてくるだけでも恐ろしいのに、じいちゃんはナマハゲが着ている藁の衣装でも無音で背後に立っていたりするのだ。一度暗くなってから家の廊下で遭遇した時は泡を吹いて倒れた。意識が戻るとそのまんまの格好のじいちゃんに介抱されていてギャン泣きした。じいちゃんはばあちゃんにボコボコに怒られていた。
　後々これ稽古を自分が受けることになるだろうなと思うと手足の震えが止まらない。幼女（）大きくなりたくなーい☆
　まあ、そんな事言ってる場合じゃないんだけどね。

「七伽、そろそろ稽古に行こうか」
「わかった」

今日はばあちゃんと組み手の日だ。
さあ頑張るぞ～～（白目）

＊＊＊＊＊＊

そういえばこの家、乙木家という。
家の門や敷地内にいくつかある道場にも立派な木札に書いて掛けてあり地味に存在を主張している。
道場は使う用途によって分かれていて、今の所私が行ったことがあるのはばあちゃんメインの格闘技の道場とじいちゃんメインの飛び道具用の道場だ。まだ使ったことはないが剣術や長物を使う道場なんかもあるらしい。
中から響いている気合の掛け声を聞きながら道場に足を踏み入れる。今道場を見ているのはじいちゃんで門下生同士の組み手の指導をしていたようだ。
しっかり準備を済ませたあと、ばあちゃんと向かい合って礼をする。この数ヶ月でこのやり取りにも慣れてきた。糸がピンと張るように空気が張り詰めて肺をいっぱいに満たす。

「いつでもいいよ、かかってきな」

離れた所に立つばあちゃんの声を聞き、構える。
少し離れていてもばあちゃんの存在感は凄い。隙があるのかどうかなんて私にはまだわからないがひたすら練習を繰り返していくしかない。
いざ！
床を蹴って相手に向かって走り寄って振りかぶった拳をばあちゃんに叩きつける。私との稽古中ばあちゃんはその場からほとんど動かずに攻撃を対処してくる。手で拳を捌き足でいなし見て分かったことを指導する。武道を始めたばっかりの子どもが挑んだって倒せる訳がない相手なので、今は習ったことを繰り返し精度を上げていく

しかない。
右、左、飛び退いて蹴り。受け止めてきた手を蹴って両手を着いて着地すると側面に回り込んで突きを放つ。当たりはしたがわざと避けなかったようで固い筋肉に阻まれてダメージは無さそうだ。
ばあちゃんは結構私と稽古する時はわざと当たってくれるところがある。門下生の人達との稽古を見ていると解るのだ。普段のばあちゃんは攻撃を全然くらわないし体に当たりそうな攻撃もキチンと捌いている。
多分私に武道を習うことがどういう事か教えてくれているのだ。もちろん習い始める前に格闘技を習う上での注意事項をみっちり教えてくれていた。
でも聞くだけじゃ理解したとは言えない。実際にやってみて、自分の拳が肉を打つ感触を知る。
「持てる者が人を傷付けてはいけない」というのはばあちゃんの言葉だ。
今の社会では人口のほとんどが個性を持っていて、各々自分の個性に慣れているがそれ故に人を傷付けてしまう事がある。一般人が普段個性を使うことは認められていないが、感情が制御できなかったり不意な事故等で無意識で個性を使ってしまったりと思ってもないところで人を傷付けることもあるのだ。更にヴィランなんて奴らもいるから悪意によって危険に晒されることだってある。
武道だってそうだ。護身の為に習ったものが、悪意があれば犯罪にだって使えてしまう。
だから、格闘技を教えているんだと、じいちゃんも言っていた。
私有地を道場として解放し個性を使えるようにする。ここに来ることで自分の個性をしっかり知り、武道を習うことで精神を鍛え力の制御の仕方を学ぶ。
その手伝いをしたいのだと。
この乙木の道場にはヒーローや警察が2人に師事しにやって来る。2人が空手でも柔道でもなんでも教えるし、何より個性が使える場所だから利用しやすいんだろう。

それから近所の不良なんかもよくやって来る。元々は2人が道場破りみたいなことをやっていた悪ガキを伸した上で受け入れたことが発端だって聞いたけど、子どもの素行を良くしたい親に放り込まれたり先に来ていた連中に連れてこられたり、そんな奴等が結構いるのだ。荒れてる連中は最初は暴れるけど2人にぶつかって伸されて行儀を正されている内にいつの間にか丸くなっている。

なんだったらここでヒーローや警察に繋がりが出来てそっちの仕事に行った人もいるって話だ。

手助けをしたいと言った2人だからこそだと思う。

私の個性は簡単に人を傷付けてしまえる個性だ。それどころか力の加減を間違えれば命を容易く刈り取ってしまえる。

それがわかっているから2人は私にこうして稽古をつけてくれるんだろう。私が足を踏み外して後悔しないように。

「ハァッ!!」

バシン！と大きな音を立てて蹴りが受け止められる。すぐに足を戻してばあちゃんの周りを駆け回り何度も突きを繰り出し蹴りを放つ。毎日じいちゃんに追われて山を駆け回っているから体力がついてきて突きや蹴りの威力も上がって来ているのが少し実感できる。実感が伴ってくるともっと強くなりたい気持ちが湧いてくる。

「狙いが甘い！もっと腰を入れな！」

「っ、ハイ!!」

まだまだ成長が足りない子どもの体じゃ対応しきれないことも多い。出来なくたって稽古が終われば「頑張ったね」としっかり褒めてくれるのがばあちゃん達だ。こういうところに不良達も絆されるんだろう。

稽古がキツくて毎回気絶していても辞めようとは思わないのがば

あちゃん達の凄さだ。
身を翻して腕を振りかぶった時ーーーー、
何かが目の前を飛んで行ってものすごい音がした。
気づけばばあちゃんに抱えられていて道場の壁際には壁に激突して伸びている門下生。
元不良がちょっとした反抗心でじいちゃんに殴りかかって反撃されたらしい。こんなことがよくあって週に一度は誰かが壁際で伸びている。
抱えられていた状態からゆっくり下ろしてもらってため息を吐く。
その横でばあちゃんが噴火した。

「アンタ！どこに向かって蹴っ飛ばしてるんだい!!」
「なんじゃ五月蝿い。静かにせんかい！」
「何が五月蝿いだ！あと少しで七伽に当たる所だったじゃないか!!」
「お前がおったじゃろうが！それに当たっとらんじゃろ!!」
「こっちに飛ばしてくるのが問題なんじゃないかクソジジイ!!!」
「なんだとこのババア!!!」

この2人、仲が良いくせにめちゃくちゃ喧嘩が多い。
ちょっとしたことで喧嘩してドンドンヒートアップしては個性込みの大喧嘩になる。
ばあちゃんの体がメキメキ音を立てて変化する。立派な角が生え肌の色は赤く色付く。元々大きかった体は筋肉が膨れ更に大きく見える。
ばあちゃんの個性は鬼。おとぎ話に出てくる金棒を持っていそうな鬼になるのだ。
ばあちゃんが個性を使ったのを見てじいちゃんも個性を使ってナマハゲになる。こうなるともうお手上げだ。
伸びてる人を他の門下生の人達と回収して道場の外に避難する。中では喧嘩が始まったのか怪物みたいな気合の声と衝撃音が聞こえてくる。

「大丈夫かー」「災難だったなー」と声をかけてくる門下生達の声に苦笑しながら返事を返す。今日はもう稽古は無理だな……。

ドゴン!!と腹に響く破壊音が鳴って道場の壁に穴が開いた。

「”妖怪道場”って名前は伊達じゃないなー」

門下生の間からそんな声が聞こえてくる。

妖怪道場。乙木の道場につけられたあだ名である。というか門下生にも近所の人達にもわりと親しみを込めて呼ばれている。

由来はじいちゃんとばあちゃんの個性があれで、しょっちゅうこんな喧嘩が勃発しているからである。

”妖怪大戦争”って言われても納得の言葉しか出てこない。

乾いた笑いが止まらない私を尻目に門下生達は慣れた様子で他の道場で個人練習するために移動を始めた。私も誘われたので見学に行くことにした。

これが今の私の日常である。

オリジン・１

テレビを見ているとよくヒーローの話題が上がる。眩い笑顔のＮｏ．１ヒーローなんかいい例だ。ヴィランが出るとすぐに飛んで来てあっという間に事件を解決してしまう。近年のヴィラン発生率を考えると本当に大変な仕事だと思う。でもそれを感じさせることなく笑顔で街の人達を救えるのは誰にでもできることじゃない。

視界の端にちらつく赤に目を移す。ここに来てから増えた色んなものは大切にとってある。あの日のリボンもそこにある。

彼はまだヒーローを目指しているだろうか。

＊＊＊＊＊＊

「よう。久しぶりだな」

来客の知らせを受けて応接間に行くと昔私を保護してくれたヒーローが来ていた。ヒーロー名はイレイザーヘッド。一個人としては相澤さんというそうだ。

彼はあの日から年に2回くらいのペースで私の様子を見に来てくれる。じいちゃんばあちゃんと元々関わりがある人だったようで、チラッと私の様子を見に来るとじいちゃんやばあちゃんと仕事の話をしに行ってる。

保護されてから5年。相澤さんは毎年欠かさず来てくれるからマメな人だ。

「お久しぶりです。大分くたびれてますね。」

「最近大きなヤマがあってな。あんまり寝てないんだよ…」

相澤さんはヒーローであると同時に有名な高校で教師としても働いてるらしい。どっちも両立させるってなったらそりゃハードだわ。

こりゃ一肌脱ぐしかないっすね～。

するり、と着ていた服が畳に落ちる。床に散らばった服の中から現れた私はいつぞやの猫姿だ。
脱げた服を口で引っ張って纏めている私を見る相澤さんの目は胡乱げだ。

「お前…、急に脱ぐなよ。もうすぐ中学だろ？」
「残念ながらあんまり気にならないんですよねー、毛皮ですし」
「野生に打ち勝てよ、合理的じゃない」

変身している時の倫理観云々は、私の精神が動物に寄ってしまうのか結構テキトーだったりする。動物、服着ないですし。ブカブカになったりキツくなったりしてむしろ邪魔だし。
人間の時もその感覚に引っ張られるのか服が脱げたり破けたりしても特には気にならない。
稽古中はズタボロになることなんて日常茶飯事だしなー。
相澤さんがいる机の反対側に回り込み胡座をかいている足にスリ、と頬を寄せる。
慣れるのには大分時間がかかったが(私が)、今は自分から癒しを提供しに行くくらいには慣れたつもりである。
しばらくそうしていると呆れたようなため息が1つ降ってきて、大きな手が優しく背中を撫でていった。
相澤さんは猫好きらしい。何度目かの邂逅でその事を知った私はたまにこんな風に猫になってみている。帰る時はなんとなく機嫌がいいように見えるから若干のアニマルセラピーになっているのでは？
毛並みに沿って撫でる手付きに目を細めていると上からの視線が突き刺さる。首を傾けて見ると感情の読めない瞳がこちらを見つめていた。

「なんですか？」
「お前、なんか悩みでもあるのか？」

……おかしいなあ。ほとんど会うことなんてないのに。
教師をしているが故だろうか。

「そんな風に見えます？」
「お前の様子が変だって乙木のじいさん達が言ってたぞ。伸び悩んでるのか？」

ガッデム、敵は身内か。
スランプになってると思われているのか。いや、違うんだけど。
んーー…、別に悩みと言うわけではないのだが。

「最近よく将来は何になりたいんだって聞かれるんですよ」

ぽつりと1つ言葉を落とす。
ある時は道場に通う子どもだったり、ある時はじいちゃん達の客だったり。
私にそんな言葉を投げ掛ける。
この道場は特殊だ。ただ習い事としてくる子がいれば訓練としてやって来る大人達がいる他に、じいちゃん達が受け入れた不良等、ーーー所謂溢れ者が結構いたりする。
自分がそうだった人や昔から道場にいる人等はあんまりそういう話題に触れてこない。
私もじいちゃんやばあちゃんの孫のように育てられているけど、血縁なだけであって実際そうじゃないことを知っている人は知っている。
そういう質問は世間話の内の1つだし、必ずしも悪いって訳じゃない。
でも、心のやわらかいところに土足で踏み込まれているように感じる人もいなくはないのだ。

「……その質問をされるのは苦手か」

「苦手というか、よくわからないです。」

だって明確なビジョンがない。そんな質問をされても困惑するばかりだ。

引き取られてからは進められるがままに稽古を続けてきただけだし、小さい頃はそんなことを考える暇はなかった。

鍛えているから「ヒーローにならないのか？」と聞かれることがあるが前向きに考えたことはなく。

ただただ来る1日を享受するだけの日常だ。

「ならやりたいことはないのか。」

「やりたいこと…？」

「そうだ。なんでもいい。だか1つくらい目標がある方が何をするにしても合理的だろう」

「相澤さん合理的って言葉好きだねぇ…」

やりたいことかぁ……。

今まであんまり考えて来なかったかもしれない。

あの家を出てから今までの分を取り戻す勢いで人として必要なことを詰め込んで勉強して稽古して。

転生のことがあるから勉強はある程度できるけど、前世と違うことは凄く多い。歴史系の話とか全然役に立たないし。

私ももう12歳になるのでそろそろ通信教育生活も終わりにして中学からは学校に行くことになっている。そもそもが義務教育だからな。

道場の中だけの関係じゃ同じ年齢層が少なくて私の社会性が危うい。習い事に来ている子がいても私の稽古内容とは段階が違うから稽古の時間が違ってなかなか会うこともない。

この間ふと気づいたが、今世の私、友達がいない。

……ボッチじゃん。友達作ろ…。

悶々と考え事をしている私の背中を相澤さんはゆるゆると撫でる。

私が考えている事をわかっているのか急かすことをしないのは教育者だからだろうか。
……あ。

「相澤さん、1つやりたいことあった。」
「そうか」
「今まで全然興味なかったことだけど、ちょっと頑張ってみる」
「……なんにせよ、お前がやると決めたのなら俺は何も言わない。まあ、やれる所までやってみるといい。」
「…はい！」

ぽふりと背中叩いた手が離れ、立ち上がった相澤さんが部屋から出て行った。……あの人実はこの話の為だけに今日来てたんじゃないよな？

＊＊＊＊＊＊

突然だが、ヒーローになろうかと思う。
相澤さんと話した時、やりたいことの事でヒーローになるのが手っ取り早いんじゃないかと思ったのだ。手段として。
大分、やりたいこととしてというか、なりたい動機としてどうかと思われるだろうが、鋭児郎君に会えないかなと。
鋭児郎君はあの日の私の恩人だ。あの時は猫だったから鋭児郎君のお母さんにしかお礼を言えなかったけど、できることなら鋭児郎君本人にも何かお礼がしたい。
でも猫だった私が突然彼の家に行ってどうする？自己紹介するにしてもあの家のことから話すのか？…話せる訳がない。
だから、ヒーローになりたいと願っていた彼が夢を叶えた時にその手伝いができればと思ったのだ。
それならば、私にはヒーローが一番向いている。
前世からして企画を考えたり物を作ったりするのは正直あんまり

得意じゃない。ここに来てからの稽古三昧の日々で、頭を使うことよりも体を動かす方がよっぽど向いてることがよくわかった。
それに自慢じゃないけどこの五年で結構強くなったんじゃないかと思う。前はお手玉攻撃で手加減されていた稽古もかなり段階を踏み、今では訓練にくるヒーロー達の組み手に混ぜてもらって白星を挙げることも出てきた。
強さはそれぞれ違うけど、手を抜かずに真剣に相手をしてくれていることはわかる。そんな稽古で少ないけれど勝てるのだ。ちょっとくらい自信を持ってもバチは当たらないだろう。……まあ、道場主である2人には勝てた試しがないのだが。
ヒーローになると決めてからそれまでよりも訓練に力を入れるようになった。
目標ができるということは人を大きく変えるのだろうか。まだそんなに経っていないのに以前よりも目に見えて力がついてきていることを実感できるようになった。
そんなある日。

「七伽。お前、熊狩ってこい」

流石にこれは予想外だ。

オリジン・２

鬱蒼と繁る森の中を自分の鼻を頼りに進む。じいちゃんとの稽古で何度も来ていた山はいつもの様子から姿を変えて、ピリピリとした緊張感を肌に伝えてきていた。普段は野生の動物の気配がするし誰かしら森の中で訓練をしているからこんなに何もかもが息を潜めたような静けさは始めてだ。

それにしても熊狩ってこいってどういうことだってばよ…。我１２歳ぞ？学校には行ってないけど小学生ぞ??

「ちょっと無茶振りが過ぎるんじゃないかクソジジイ……」

ーーーーー時は少し遡る。

「……は？」

「じゃから山に熊が来とるからお前が狩ってこいと言っとるんじゃ」

「いや唐突過ぎるわ」

じいちゃんに呼ばれて道場に行くとじいちゃんとばあちゃんが２人で待っていた。いつもは門下生がいる時間なのに今日は１人もいない。

正座で座っている２人に習い向かい側に腰を下ろす。

「七伽。お前の成りたい物は何だ」

開口一番、厳めしく細められた瞳がひたりと此方を見据える。何時にない鋭さの視線に晒され背筋が伸びる。

「お前が何かを目標に据えた事は気付いておったよ」

「それが何かは問わん。じゃがのう、ちっと考えが甘いんじゃないか

のう・・・？」

チリチリと底冷えするような緊張感が背中を撫でていく。じいちゃんの隣に座るばあちゃんの顔は普段の優しい表情と違い、ピクリともせずに何の感情も伝えて来なかった。異様な空気に喉が引き吊って吐息ばかりが漏れる。

「それでも成りたいと言うのなら儂等は止めん。代わりに覚悟を見せろ」

「・・・はい」

じいちゃんは多分、私がヒーローになろうとしている事に気付いてる。それがすこし不純な動機だと言うことも。だからこそ覚悟を見せろって言ってるんだ。課題を与えてそれを乗り越えようとするだけの強い意志があるのかを。だからって何で熊狩り。

……まあ、これを乗り越えなければおそらく本当にやりたい事はさせてもらえないだろう。かの有名なヒーローが言っていた。プルスウルトラって奴だ。やるしかねぇ・・・！

森の中を走り回って小高くなった奥の方までやって来た。この山の中でも緑深いこの場所からはいつもの稽古の時に嗅ぎ取る生き物達の残り香よりも強い匂いを感じる。今世では個性の影響か微細な匂いまで嗅ぎ分けられる鼻はここにターゲットがいることを明確に伝えていた。

足を止め意識を集中させると靴底からこちらに向かって近付いてくる重みのある振動を感じることができた。

ガサガサと茂みを掻き分けて現れる太い脚と濡れてててらりと光る鋭い牙。離れた位置からでもわかる血走った目が自分の領域を侵そうとする敵への興奮に燃える。

こちらを見定めるが如く睨め付ける圧倒的強者に膝が笑いそうな程の恐怖に震えるが、ここまで来たら引き返せる訳がない。

『熊に追われた連中が怪我をしておる』
『儂はマタギもしたことがあるし家の山は私有地じゃ。
――――手段は問わん。』
詳しく事情を話したジジイはそう言っていた。この世界での狩猟についての法律がどうなってるかは知らないが、そうまで言うからにはジジイが求める覚悟とはそういう事なんだろう。命のやり取りをすることもあるだろう仕事に着こうとするだけの、意志があるのかどうかを。
「……どこまでやれるかわからないし最悪死ぬかも知れないが、やるしかないよなぁ!?」
「グルルァァァ!!!」
野生の本能のままに此方に飛び込んでくる巨体に向かって拳を振り翳した。

突き、蹴り、受け流す。当たれば怪我じゃ済まなさそうな爪は触れないように腕ごと殴りつけて躱していく。
重さの乗った突進を転がるように避け様子を窺う。
切り替えして食らいついてくる鼻先を踏みつけると同時に高く跳び近くの木の枝に着地する。
足元では肉を噛みちぎり損ねた憤怒の瞳が腹立たしげにこちらを見上げていた。
今の所ステゴロでの戦いはあまり結果が出ていない。
当たりはするが硬い皮膚や厚い脂肪に守られて中まで攻撃が通っていないようだ。まずもってなんの強化も無しに挑み始めてしまったのが間違いなのだが。
こちらは若干の擦り傷やかすり傷はあるが出来る限りヒットアンドアウェイでやり合っている為目立った怪我はしていない。
というかそもそも何故素手で戦ってるんだ私は。個性を使え個性

を。ビビってトチってる場合じゃないんだぞ…！
ズン、と足場が揺れて気付けば内臓が浮くような浮遊感。幹に足をかけた獣の閃く爪が近づいて。ヤバッ……！

「、ガッ…!!」

視界が赤に染まってその後に感じる腕の熱、地面に打ち付けられて肺から空気感が押し出される。反射で腕を獣に変えて弾こうとしたが失敗し、モロに爪を食らって吹き飛ばされた。
肩から二の腕にかけて皮膚が裂け真っ赤な血が服と地面を濡らしていく。
茫然と流れ出る液体を見ていた一瞬を逃さずに追撃してきた巨体にハッとして転がるように体を投げ出し走って、走って。
追ってくる足音が聞こえなくなった所で茂みに潜りへたり込んでしまった。
こんなのただの時間稼ぎだ。怪我をしたから血の匂いを辿られて何れ追いつかれてしまう。そうだ、止血を……、
破れた上着を脱いで包帯代わりに引き裂こうとした手がガクガク震えるのが。抱えた膝に吸い込まれていくいくつもの透明な粒が。自分の甘ったれた心を表しているようだった。

「ちくしょう……、」

痛い熱い怖い逃げたい。
何が〝死ぬかもしれないが〟だ。死ねる程の覚悟なんてこれっぽっちもないじゃないか…！
一発まともに食らったくらいでなんだよ。稽古で骨が折れたこともあっただろ。
自分の失態への動揺が頭いっぱいに広がって、思考する余力を奪っていく。
情けない自分に嫌気が差してゆるく頭を振るとくらりと視界が揺

れる。止血の途中だった事を思い出して引き裂いた布地をのろのろと腕に巻く中で、皮膚を染めている血にふと目が引き寄せられた。

「あかいろ……」

これはなんの色だったか。血が足りなくて歪む視界を一度閉ざすとまあるいきれいな色が瞼の裏に浮かんでくる。昔見たあの色はこんなに汚い色ではなかったけれど。

……〝約束だ〟と言ってくれた彼にこんな私で報いることができるのか。

ヒーローになると言っていた彼を手伝いたいと思った自分は嘘だったか。

未だ震えが走る手を握りしめて膝に打ち付ける。

逃げ帰る訳には行かず、唇を噛み締めた。

のしのしと。重たい足音が少し離れた所を臭いを辿りながら歩いている。鼻先が向かうのは先程まで私が潜んでいた場所だ。長く留まっていたから血の匂いが濃いのだろう。

ウジウジ考えるのはもう止めた。そもそも考えるのは苦手だし、怖いものはしょうがない。

そもそも今まで個性があるにしろ自分が猛獣になれるにしろ、あんなガチな野生動物と対面する事は初めてだったんだ。ションベンちびらなかっただけ褒めてくれ。…汚いな。

とにかく。

ここを切り抜けない限りは生きて帰れないだろうし、その先の願いを叶えるのは夢のまた夢だ。最悪死ぬかも所か死ぬ気で挑まなきゃ生き延びる可能性すらなくなるだろう。

理性なんて捨てて、生き残る為に個性を活かせ。それができないなら大人しく死ね。

きっちり止血し、血臭をこれ以上辿られないように木の葉や土を体にまぶして木々の隙間から眈々と目標を見つめる。

物音を立てないように慎重に背後に身を潜め機を窺う。
獲物を狙う狩人のように息すら殺してジリジリとその距離を詰めた。
ふと頭を地面に寄せていた熊が顔を持ち上げようとし、完全に上がりきる前に力強く地面を蹴ってその晒された首元に力一杯齧りついた。分厚い首の皮に鋭く伸びた牙を押し込み暴れる巨体に爪を立てて押さえ込む。
背後から飛び掛かられマウントを取られた熊は突然の襲撃に驚き半狂乱になって腕を振り回し体を揺すり暴れ回った。背中に貼り付いているから上手く当たらないが時折掠める爪や牙が身を削り血や白い毛が飛ぶ。
私は今虎へと姿を変えている。牙を剥き出しにして爪でガリガリと肉を削って抗う。人間よりも何倍も力ある姿で人としての在り方を忘れて相手の息の根を止めようと己が持つ武器を振り翳す。
襲撃者が背中から離れず攻撃は当たらず己ばかりが削られている事に怒った熊は唸り声を上げながら地面を転がった。縺れ合い振り回され時に下敷きにされながらも噛みつくのを止めない。

「ギャウンッ!!!!」

脇腹の猛烈な痛みに思わず悲鳴を上げた。ギチギチと食い千切られそうな痛みが耐え難く、滅茶苦茶に手足を振り回してやっとの事で離脱した。様子を窺えばさっきの攻撃が何とか当たったようで相手は顔から血を流し、体は今までやりあった中で傷付き想像していたよりも深手を負っていた。
まだ、まだだ。まだ相手は立ってる。
ジクジクと痛みを訴える脇腹の傷を押さえながら体を起こす。もっと力を引き出す為に個性で体を作り替えていくと変化による負荷に耐えきれず傷口から血が吹き出した。
それでも堪えて立ち上がればしっかり戦う為の準備は出来ていて。
虎を人に近づけたような、獣と人間が合わさったような姿のいきも

のがそこにいた。

「ウルルアァッ!!」

「ギャアッッ!?」

一足飛びに接敵し渾身の一撃を顔面にぶち込んだ。急所を打たれて怯んだ隙にすかさず突き出した鼻面を肘と膝で挟み打つとメシャリと固いものが潰れる音がした。喉奥でくぐもった声を聞きながら更に蹴り上げ骨を砕く。

人の力とも四本脚で出来る動きとも違う明確な差異。

確かな手応えを持って相手を追い詰める。

下から首元を蹴り飛ばし一度離れて脚を踏み直す。軽い音を鳴らして跳ね上がった高い場所から相手を見下ろして。

こんな事で命を狩るなんて私の都合以外の何物でもないのだけど。

だからこそ。

「……無駄にはしない、！」

絶対に。

刹那に閃いた脚から繰り出された一閃が、此方を振り仰いだ首を叩き折った。

「、ぐぅッ……！」

痛エ。これ一言に尽きる。

大量に出ていたアドレナリンが切れ、そこかしこに散らばった傷が熱と痛みを呼ぶ。それでいて体は流し過ぎた血のせいで芯の方から冷え、手足が痺れて動きが鈍い。

霞む目を凝らしながら見つめ続けた先の黒山は既に活動を止め、

さっきまで燃え盛っていた命の灯が尽きた事を　　伝えていた。
鈍い体を引き摺って手で触ってもう一度確かめて。自分が生き延びた事を実感して腹の底から長く息を吐き出した。本当に出てきそうな物は喉元までで押し留め。
一気に重たくなった体が重力に負けてずるりと横に崩れた。
掌に感じる毛は固くて、感覚の鈍った手でも感触を伝えてくる。その下の温度は燃えていた炉が消えてじわじわと熱を落としていた。
これは自分のエゴで奪った命だ。

「……う、ッ……、」

だから泣く資格なんてない。
それは私がころしたコイツに対しての冒涜だ。

「…本当に、ごめん。それか、ら、あり、がと…う……」

コイツの命に誓って願おう。
命と夢を背負って進む覚悟を。

＊＊＊＊＊＊＊

病院ってなんでこうも薬臭いのか。
人よりよっぽど獣寄りの嗅覚をしているから鼻が馬鹿になりそうで仕方ない。
あの熊狩りから数日経ち。近所の病院まで抜糸に行ってきた。
あの日山でぶっ倒れた私は、一応何処からか様子を見ていたらしいジジイに回収され、下山した。
全身傷だらけ、ギリギリ骨折はないもののヒビが数ヶ所。最初に怪我した腕はやり合っている間に噛まれて更に傷が抉れていて痕が残

るそうだ。……まあ、そんなに気にすることでもない。
大きい傷をいくつか縫って塞いで抜糸。これがまだ1週間経たない間の出来事って事が驚きだ。いくら治療向けの個性持ちが病院にいるにしたって、この世界の人達は皆頑丈が過ぎる。
熊なんて前世基準なら会敵即オワタ／（＾ｏ＾）＼って感じだろ？わからない人は「熊　顎の力」で○Ｋ　Ｇ◎ｇｌｅだ！
帰って来た自分の部屋で、出掛け用の服から動きやすい室内着に着替えようと服を脱ぐとキッチリ巻かれた包帯が目につく。
完治するまでは稽古も全部お預けだ。凄く体が鈍りそうだ……。
げんなりしながら着替えを済ませると部屋の外から声が掛かる。
扉を開けると毛だらけになったジジイがいた。

「ジジイ何それ」
「爺様と呼べ。お前が狩った熊だ」
「は？」

熊ｉｓ。
ジジイは腕いっぱいに抱えていたそれの端を持つとさっと開いて床に広げた。これは……、

「……毛皮？」
「お前が下手くそじゃからズタボロだったもんでの。見れる所だけ残してこんだけじゃ。」
「下手く……!?生きるか死ぬかでそんな事まで構ってられるかよ!!?」

一辺が1ｍにも満たない歪な毛皮。何処の部分なのかはわからないが、これが今回の死闘の戦果らしい。
触って見れば指先に固い物が当たり、辿っていけば縫って補修した跡だと気付く。
……これは今の私だ。とても、拙い。技術も、個性も。

「のう七伽。お前の成りたい物は何だ？」

俯いた頭の上から数日ぶりの問いが落ちてくる。

その声音は前に聞いた時よりも弛んだ音をしていて。

そっと顔を上げると厳しい顔をしようとして失敗したような何とも言えない顔をしてジジイが座っていた。

「……お前の覚悟は見せて貰った。お前は戦いにおいて慢心しておったし、技術も個性の扱いも相手に立ち向かう為の気力も何もかも足りとらんじゃったが、それでも腹を括って戦って勝った」

「……」

「お前は死なず、生き残ってここにいる。己と戦い覚悟を決めたからじゃと思ったがのう。」

「困難な事を受け止める。覚悟とはそういうものじゃ。てっきり逃げ帰ってくるかと思っておったのに、あれだけの事をやり遂げたからには成したい願いがあるのじゃろう？」

慢心か……。自分ではあの時思い至らなかったがあれは確かに慢心だ。見通しを立てずにステゴロで突っ込んで、個性も使わず呑気に樹上で様子見なんかして。

稽古で大人にも勝てるようになってきたからと、それを心のどこかで驕っていたんだ。だからこそこれだけの怪我をした。

だけど、ジジイはそんな失態と結果を見た上でまた質問をしてきている。

……じいさんが望む覚悟はこれで良かったのだろうか。

「……ヒーローに。昔の恩人に報いる為に、ヒーローになりたい」

姿勢を正して床に手を付き深く、深く頭を下げた。どうか……。

「……そうか。ならば、後悔のないように。己をよく見つめ腹に決め

た覚悟を忘れぬよう。」
「……！ありがとうございます、爺様」

きっと忘れずに前に進もう。自分が誓った願いをしっかり括りつけて。
あの日の馬鹿で情けない自分を記憶の片隅に焼き付けて。

あの日の熊肉はスタッフ（本人と愉快な妖怪家族）が美味しく頂きました。
なお、スタッフは地獄の稽古により中1で身長が止まりました。遺憾の意！

数学なんてクソくらえ

「ついに来たなぁ」

天気は快晴。受験日和である。

眼前には端が見えない長い塀と物々しいゲート。

にしても……

「クソでっかいなー……」

やってきました、雄英高。

中学から学校に通い、襲い来る若いコミュ力のお化け共に揉まれ流されここまで来ました。

現役中学生の勢いこわい。中身おばちゃんはついてけない。正直外身に引っ張られて中身が子ども返りしてようが、ほとんど同年代と触れ合わない幼少期を過ごした私としてはブランクがデカイのである。

「四葦、行かないのか？」

「あ？悪い、今行く」

ヒーローを目指すという事で志望校は最難関の雄英にした。近場にもヒーロー科がある高校は無くはなかったが、やっぱり有名な所の方が力をつけるには近道だろ！とばかりに願書を出してからが若い力との本当の戦いだった…。

うなれ、拙僧のコミュ力!!

ちなみに今一緒にいるのは障子目蔵君。

同中でクラスが被った事もあり、対人スキルに難がある私とも割りとスムーズに話せる御仁である。

体はでっかく心もでっかく、友達思いの紳士（ジェントルマン）である。

同じクラスでは大変お世話になりました。

先を歩いていた背中を追いかけながら玄関口に吸い込まれていく特色溢れた人の群れを眺め、ここから見える何人が夢への切符を勝ち取れるのだろうかと考える。
今年の偏差値は79、倍率は毎年300オーバー。
ヒーロー科への入学は、推薦入学者を除けば36人分しか枠がない。
実技はよっぽどの事が無ければ行けると思うが、筆記がなぁ……。不安だ……！
コンパスの長さが違い過ぎる障子の横に並ぶと、さり気なく歩調を緩めてくれた障子からちらりと視線が飛んでくる。

「……なんだよ」
「おまえなら大丈夫だろう」
「ハァ？……エスパーかよ」
「分かりやすいからな」
「マジでか」

障子の個性が索敵特化にしたってこんな所まで索敵してこなくっていいんですよ。
まあ、そこそこ付き合いある故か。

「あんがと。……試験じゃお互い競争相手になるが、頑張ろうぜ」
「そうだな」

お互いに拳を差し出しぶつけ合わせる。
ハァ～～、なんか青春っぽい。アオハルかよ。
いや年寄りくせぇな。
とりあえずやれるだけやりましょーかね。

＊＊＊＊＊＊

筆記終了。数学死んだ気がする。
前世でもどんだけやったって苦手だったんだよなあ。数Ⅰも数Ⅱも数Ⅲも仲良くなれない。
若い脳みそのお陰で前よりはよっぽど吸収率はいいんだけど。
そんでもってこれから実技、１０分間の対敵想定の模擬演習。
これだけの受験者がいるから会場はいくつにも別れていて、同校の生徒はそれぞれ分けて配置された。個人の力を見る場だから当然だと思う。
動きやすい服装に着替えて試験開始まで待機。
格好としては、襟元や肩口が広く開いたタンクトップにウエストがゴム素材のハーフパンツ。その上から膝まで長さのあるフロントチャックのオーバーサイズトレーナーを着て、裾留めにチャックを少しだけ上げている。
なんちゃってバスケ部スタイルにトレーナーを中途半端に引っ掛けてるから変な格好だが、現状これが戦う時の最適解だ。変身するとタイトな服は破れて大惨事なんだわこれ。場合によっては布で首が絞まるし大事な所がモロリする。
個性のせいで一部の倫理観やら人間的な感覚が欠落しかかっている私でも、体に凸凹が出来てきた頃から流石にモロリは駄目だろと前世で培った人間性が猛抗議してきて……。中学上がる前に相澤さんにも注意されたし……。
悲しい事に、今の所変身と同時に服が消えるなんて魔法みたいな事は起きた試しがないから、何枚も服をダメにした末にこのスタイルに落ち着いた。
とりあえず中の服が破れたら上着閉めときゃどうにかなる。
ついでにだが、今日みたいにブカブカタンクトップだと胸が脆見えなので伸縮素材のチューブトップを着けている。
ちょいちょい周りからの視線を感じつつもそろそろかな～と体を解しながら待っていると、

『ハイスタートー!』

足のバネに任せて集団の頭上を飛び越え市街地の中へと駆け出した。

手近な所は直ぐに激戦区になるだろうから今のうちに奥に進んでそっちから狩ろう。

後ろでは試験監督のヒーローに発破をかけられた受験生達が一気に飛び出してきていた。

急な合図で呆けてたんだろうけど、普通はそういう反応だよなぁ。私が家での突発的な戦闘に慣れてるだけか……。

奥へと駆ける道すがら、行きがけの駄賃とばかりに仮想敵を攻撃する。厳つい見た目の割に案外脆い。どの形でもまだ素手でいけている。

まだ個性は温存しているが、昔みたいに慢心して使っていないわけじゃない。私の個性は変身の時が一番体力を消費するから、可能な限り消耗は抑えておきたい。

だが足が速い奴等がそろそろ追いついて来たから、使わないままってのは無理な話か。

これまでに倒した数は１３。デカイのが多かったからそろそろ３０Ｐになるだろう。

結構奥まで来たし個性、使うか。

「２９、３０……!くっそ、小せぇのばっかり来やがる!!」

今何Ｐだ!!

個性を使い始めてから足が速い１Ｐロボしか寄って来ない。

蹄に変わってる足のせいでガンゴン高い音が鳴るからか。

寄ってくるから探す手間は省けるが、合計何Ｐかわからなくなってきた。

周りに動かなくなった残骸が積み上がっていく。
ゴキゲンにヒュンヒュン飛んできやがって…、噛み砕くぞゴルァ!!
苛立ち紛れに山になった塊を蹴っ飛ばしながら跳ね上がると、轟音を立てながら真横の壁が崩れ、勢い良く振られた腕が…。……うで？ちょ、ま、今空中!!

「ハァアッッ?!!
!?!?!!」

咄嗟に脚を構えて蹄で受ける。景気良く吹っ飛ばされたが、折れては、ない！
衝撃が殺しきれてないからビリビリする……！
空中で体を捻ってどうにか怪我なく着地し状況を確認すると、少し離れた所に見上げる程に巨大なロボット。そこから放射状に逃げていく人の群れ。
アレが所謂ギミックか…！さっきのはヤバかった。一歩間違ったら大怪我じゃ済まなかったぞ……。
思わず鳥肌がたった腕を撫でる間にもアリの子を散らすように受験生達は逃げていく。
しまった、こんな所で突っ立ってる場合じゃないな。
もう時間はないだろうし、ギミックを躱しながら残ってるPを稼ぐか…？
そう思いながら、ヤツから距離を取ろうと駆け出したのに、

「……ッ！……けないッ!!」

伸びた耳が声を拾った。
バッと声が聞こえた方を向くと壊れたロボットの影に女の子が1人。この混乱の中で瓦礫が振動で崩れてきたんだろう。足が隙間に挟まれていた。
その子がいる場所はギミックの割りと近く。もうすぐ太い腕のリーチが届く。

どうする!?このままじゃあの子は……。

「頭伏せて!!」

気付けば脚は瓦礫を蹴り飛ばしていて。後ろには抜けた足を見てポカンとした女の子。

上手くいって内心ホッとしつつも、直ぐに女の子を掬い上げて走り出した。

「大丈夫か?」

「えっあ、どうにか!助かったよ!」

「よかった。このまま逃げるぞ!」

「ええっ!?」

耳元でなんだかわーわー言ってるけど、脂汗かいてる女の子を下ろすわけにはいかないなぁ。挟まれてた方の足が痛そうだ。流石にのんびり下ろしたりしてたら追いつかれる。

そうしていると、進路の先に今度は座り込んだまま腰を抜かした男子。マジかよオイ…。

「なあキミ、あの男子任せていいか?」

「ハ!?え、まさかアレと戦うの!!?」

「流石に2人も抱えるとなると機動が落ちて追い付かれる!」

「まず2人も持てる事にビックリなんだけど!って、ちょっと!!」

目標まで辿り着いたから問答無用で件の男子の横に下ろして来た道を戻る。

もう終わりが近いなら囮になって時間を稼いだ方がマシだ!!

まずは一丁…!

〝パンプアクト〟

「セィアアッ!!」

気合一閃。伸びてきた腕の下に潜り込んで関節部をかち上げる。メキリと歪むも取れたりはしない。

他のロボよりもかなり丈夫だ。

「もう、一丁ォ!!!」

凹凸がある金属の出っ張りを掴んでグワリと体ごと腰を捻ってもう一閃。力尽くでの一発に今度は派手な音を散らして肘らしき所から先のパーツが脱落した。

「ッハァ!次!!」

戦闘はまだ終わってない、まだ残りの腕が来る!!

『終了〜!!!!』

「、ぁあ!?!」

終わっ、た……?

やっと終わった…!10分なのに最後めっちゃ長く感じた!!

腰に手を当てデカイ溜息を1つ。

目の前で停止したギミックを見上げる。……ふつーに試験だからって壊しまくったけど、これ誰か修理すんの?どんだけ予算持ってるだろ雄英……。

深く考えてはいけない。帰りましょーか。

救護の職員を探してとりあえず人の流れる方へ歩く。
片腕にかわいい女の子。反対の肩に図体のデカイ男。
俗に言う片腕抱きとお米様抱っこである。
肩の上のメンズはメンタルがやられて魂が抜けていた。
すまんな。体格的に小脇に抱えると引き摺るんだわ。
腰を抜かした自分を恨め。
メソメソしているメンズをチラ見して腕の上の彼女が苦笑した。

「……あんた、強いんだね」
「うん？いや、まだまだだよ。家じゃまだまだベッコベコに扱かれてる」
「ブフッ、あれだけ強いのに…？凄い家なんだね」

言い方が面白かったのか短い髪を揺らしながら笑う顔がかわいい。
……そういや今世まともに女子と触れ合ったことあったか？中学時代？あれはちょっとなんか違う。
最近は口が悪すぎる気がするから、対女子だしなるべく柔らかく話してるつもりだけど、…大丈夫そうだ。
あ”ーーーーーー、凄いマイナスイオンを摂取してる気がする……。これが癒やしか。
テンションも上がって耳がピルピル揺れる。
気になるのか頭の上で気配がソワソワしている。

「耳気になるか？」
「……気になる」
「どーぞ？」
「う、うん…」

さわり。そうっと伸ばされた指が優しいタッチで短い毛並みを撫でる。擽ったさに思わずピピンと跳ねた耳に驚きつつも「はわ…」と気が抜けた声が聞こえてきて吹き出してしまった。

「なんの個性か聞いてもいい？」
「簡単に言えば変身だな。動物になれる。今日はワピチって鹿だ」
「なるほど、確かに鹿の角じゃん。バキバキだね」
「何回も頭突きしてたら流石に向こうの強度に負けた」
「ロックだねあんた……」

なんかちょっと呆れられてる気がするぞ…。
安定の為に角の長めに残ってる部分を持ってもらってるから頭が動かせない。

「そうだ。…改めて、今日は助けてくれてありがと。ウチは耳郎響香。個性は耳に付いてるイヤホンジャック。……よろしく」

そっと頭を彼女に無理の無い範囲で動かして覗き見ると、頬を染めて恥ずかしそうにしている耳郎さん。

「かわいいかよ……（こっちは四葦七伽。こちらこそよろしく!!）」
「……あんたバカなの…!?」
「（俺今何を見せられてるんだろう……）」

しまった本音が。
真っ赤になってそっぽを向いた彼女に自己紹介をし直した。
会場の出口まで戻ってきて耳郎さんを職員に預け、腰が良くなったと言いつつもなんとなくヨボヨボしているメンズを開放して。

合流した障子と地元に向って帰る途中で、友達になった彼女と連絡先を交換していない事に気がついた。
ガッデム!!!
!!

（はじめて女子の友達ができました！）

門出

擬態する生き物って知ってるか？
擬態ってのはそもそも他の物に様子を似せる事。自然界では虫や爬虫類、鳥や魚など、挙げ始めたらキリがないくらい似せる事に特化した生き物達がたくさんいる。
その形は多岐に渡って、生き物達が生存競争をする中で考え身に着け勝ち取ってきた闘う姿なのだと、小さい頃に見た分厚い図鑑を見て思っていた。
なんとなくそれが自分の個性と似ているとも。
それが生き物として正しい色を持てなかったり本物に成りきる事が出来なかったりするような出来損ないであるとしても。
……まあ、自分の色が白いのはしょうがないし、変身してどれだけ性質が動物に寄ろうと中身が人間であるならばどうしようもない事なのだけど。
結局、何が言いたいかといえば。

「変身したら服が消えたり衣装チェンジしたりするのはお約束じゃないの????」

美少女アニメとか○○ライダー系とか、そういうの、あるジャン??
元オタクの思考回路に頼るべきではない。

＊＊＊＊＊＊＊

入学試験から1週間。
合否の通知が届いた。

『すまん。間違って開けた』

他の郵便物と一緒に届いていたのをじいちゃんが間違って開けたらしい。

いやいや、そういうのって私が一番に開ける奴だろ!!?と思いつつ自室に引っ込んで中身を取り出す。

中には数枚の紙と小さな丸い機械。

とりあえず明かりに翳して見てみても何もわからず、先に書面から読もうと机に置くと、機械音。

『私が!!投影された!!』

「は?オールマイト?」

小さな機械から現れたオールマイトが映るホログラム映像。

置けばよかったんかいこれ……。

『〝なんでオールマイトが!?〟って思うだろう?実は来年度から雄英に勤めることになってね!合否通知の担当になったんだ』

『それでは試験結果をお知らせしよう!筆記は合格!でも数学がギリギリだったね……。予習復習を怠らない事!それが必ず君の力になる!!』

やっぱり数学ヤバかったか……。

わかっていた事だけど落ち込むわ……。

『そして実技!46Pと高得点!!かなりの数の仮想敵に囲まれながらも状況を打破したその強さは素晴らしい!

更にここに+で審査制のP、救助活動Pが加算される!敵を倒すだけではヒーローとは言えない。人救けをすることもとても大事なヒーローの仕事さ!

君は危機的状況に晒されながらも人を救け、厳しい状況だと理解す

ると瞬時に自分を囮とし、敵の目を要救助者から逸らさせた！』

空中に広げられた映像、オールマイトの後ろの画面に映される耳郎さん救助劇からの対ギミック戦ダイジェスト。

って何で今〆に人２人抱えて撤収してるシーン入れた…？もうそこ試験終わってるじゃん??

『それ故に、救助活動Ｐ３１Ｐ！２つの得点を合わせて合計７７Ｐで、１位での合格だ!!!』

「１位……？」

まじで？直前の映像のせいで頭に情報がはいってこないんだけど。

『ちなみに、今年の実技試験の１位は君だけじゃなくてな。同率１位で２人の首位がいる！来年度は特別措置として毎年４０名で設けているヒーロー科の定員を１人増やすことになった!!これから君は４０名の仲間と共に夢を目指していくことになる！』

『未来ある君に私が言おう!!』

『君は、ヒーローになれる!!』

「合格した……っ」

雄英で待ってるぞ！、とフェードアウトしていくオールマイトの姿を見送って、私はやっと掴み取った可能性を実感した。

＊＊＊＊＊＊＊

「被服控除、ねぇ」

届いた書類を整理していく中で出てきた書類。
ヒーロー科に在席するにあたって、要望を出せばそれに合ったコスチュームを作ってもらえるらしい。
とんでもねー制度だな。太っ腹かよ。

「うーーんんん……」

要望、要望……。めっちゃお願いしたいポイントあるんだけどそれが1番ネックな奴なんだよな～～。
ズバリ、変身時の服問題。
入試の時はすんごいダルダルな格好で実技受けたけど、あの姿は正直不本意なのだ。
服が脱げたり破れたりしないのならばもっと別の格好ができるのに…！
一時期はホントーにこんな事どーーでもよかったんだんだけどなぁ!!
人型じゃなかったらなんとでもなるのに、本来人間である事によって発生する、自分の感覚と社会の常識と前世の自分との板挟みどころか三つ巴による内面の矛盾……。ついでに年齢的に所謂思春期の範囲内だからか体に引っ張られて不安定さマシマシィ！

……よっし、相澤さんに相談だ！
ヘイ相澤さんカモーン！
とゴキゲンに家電から電話してみたけども、はよ携帯買ってくれないかなぁ……。将来的に障子とか、あとこの間連絡先聞き忘れた耳郎さんとも連絡取ってみたいんだけどなぁ…。まずもって2人が受かったかも知らないんだけど……。

「はい、相澤です。」

「こんばんわ相澤さん、今大丈夫ですか？」
「あ？お前か。爺さん達かと…。要件はなんだ？」
「実は相談したい事がありまして……」

カクカク云々。
被服控除を利用する上で悩んでいる事を並べて説明すると、「今の2年に似たような事で困ってる奴がいたな…」と少し考えながらもアドバイスをくれた。
とりあえず材料として髪の毛を少量、要望と一緒に提出する事になった。
そういやこの人最近コスチュームで来ないけど、ダルダル系っつーかダウナー系っつーか元祖小汚い系だったな？
色々と話し込んでいると時間が経つのが早い。就業後かなってタイミングで電話してみたわけだけど、忙しい人だからあんまり長く拘束していたら申し訳ない。

「今日はありがとうございました。助かりました」
「書類関連は早めに送れよ」
「わかってますよ」

信用ねーなと思いつつ、電話を切ろうとする。

「合格おめでとう」

下ろしかけた受話器から聞こえた声に若干口元がニヤけながらも、しっかりお礼を告げてから会話を終えた。

＊＊＊＊＊＊＊

雄英高校から電車で２駅。駅からしばらく歩いた所にあるマンションの一部屋が新しい私の部屋だ。
家の隣に山があるようなド田舎に１０年近くいたもんだから、こっちの発展具合に圧倒され気味だ。
何せ、こんなにミチミチに建物が乱立しているような所に来るのは前世以来だから、都会ってこんなんだっけ…？と思わず考えてしまう程。
入試の時にも来たけれど目がチカチカして仕方がない。
とにかく入学までには家周辺を探索したり自主練したりさながら慣らすしかないなぁ。
部屋の中を見回すと、今回の引っ越しに合わせて買ったベッドと机と衣類を入れるチェストくらいしか目立った物が無くって、面白みも何もない部屋である。家から持ってきた物は片付けてしまって、机の周りに参考書や動物の図鑑、勉強道具用のカラーボックスを置いてもまだまだ場所は余っている。
前はあれだけ２次元に入れ込んで収集物もたくさんあったんだけど。今はそういう文化に殆ど触れていなくて、それどころじゃない日常もあったからか。
でも、それだけ物欲がないような私でも何も持っていないわけじゃない。
本を立てたカラーボックスの上、蓋がついたシンプルな小物入れの中。
中途半端な長さは邪魔くさいからと伸ばすに任せて結っている髪を、たまには可愛くしてみなさいとばあちゃんや道場にくる人がくれた髪留めや結紐。
それから、仕切られたケースの中に入れられた、私には勿体無いようなたくさんの色の中に一際目立つ色の１本。
あの日に貰った赤色のリボン。
月日が経っても未だに色褪せないリボンは、高いお菓子の箱のラッピングだったのか、滑らかな肌触りで端が解れないように模様が入ったシルバーの金具で縁取られていた。

そこそこ長さがあってお洒落な代物だったから出来心で編んだ毛先にゴム代わりに結んで見ると案外様になっていてびっくりしたのが数ヶ月前。

自分キモチワルイナーとか思いながらも、見ると個人的に落ち着く色なので気が向いた時に着けている始末。

完全にライナスの毛布状態で乾いた笑いしか出ない。

これ以上に大切な物はこの道を進めば増えていくのだろうか。

脳裏にちらりと過った最近友達になった女の子。やっと携帯を手に入れて、卒業式で会った時に連絡先を交換した、散々世話になった背の高い友人。

そうだといいなと思いながら、もうすぐそこに迫った新しい日常に思いを馳せた。

今日からヒーローアカデミア

夢を見ている時に、これが夢だと気付くときがある。
そういう時は眠りが浅くなっているのか、大体途中から夢に干渉できるようになるのがいつもの事で、まるで他人の視点を借りて俯瞰視する自分の姿を、ゲームのアバターのようにくるくる動かしてそんな不思議な感覚を楽しむ。そのうち夢の途中でフェードアウトして、目が覚めた事に気付かずに寝ぼけたまま夢での会話の続きにツッコミを入れてしまったりする事も。
今日の夢もそうだ。
いつも私の夢は暗い森の中から始まる。
そこから先は内容が違うことが多いけど、今日の夢は1番よく見るパターンの夢だ。
霧に染められた森の中で白い息を吐き出しながら簡素な服を着た私が倒木の上に座っている。そこから自主的に動く事はまず無くて、夢だと気付いた後、別視点から見ている私がその日の気分によって勝手気ままに動くのだ。
今日はどうしようかと、スルリと腰掛けていた木から滑り降り柔らかな草を踏み締めて。
足元は裸足なのに露打つ地面の冷たさや濡れた感覚を伝えては来ないし、昔やったゲームで見たような淡く光る蛍光色のキノコがそこかしこに生えているのにも何も思わないのだから、改めてこれは夢だと再認識した。
あの大きなキノコ、確か触ったら何か出てきたな、となるべく近寄らないようにしつつ宛もなく歩く。
中学時代に、仲良しグループで固まっていた女子達が「夢には意味がある」んだとギャーギャー騒いでいたな。猿山みたいに騒がしくって大して聞いちゃいなかったけど。
なんとなくで足を進めながらふと上を向くと、闇に沈んで黒く染まる木々の隙間から、夜が明ける前のような、日がくれた後のような、薄青く染まる空が見える。

顔を戻せばいつの間にやら場所が変わって、木がまばらになった、森の淵にあるような所にいて。
今度は木が少なくなっていく方に向かって歩いていくと、森を抜けて、切り立った崖の上で、薄青かった空は少しずついろあせてーーーーー、

「……朝だったのか」

この夢にはどんな意味があるのだろう。
夢の中の空のように、カーテンの向こうから暗く沈んだ部屋に色が足されていく様子を夢うつつで眺めていた。
そのうちしゃっきりしてきた頭を振ってヒンヤリした床に足をつけ、すっかり白っぽく染まったカーテンを開け放つ。

「まぶし……」

今日は入学式だ。

＊＊＊＊＊＊

２駅乗った電車を降りて軽く走る。
朝からずいぶんボーッとしていたから何時も起きる時間からしたらかなりの寝坊になってしまった。
今までは朝が早いじいちゃん達と暮らしてたから、４時５時に起きるのは当たり前。そんな生活が長く続いていたから寝坊する事は早々ない。
いつもは朝から自主トレをしているんだけど、新しい通学路で迷う可能性を考えたらそれどころじゃなくなってしまった。
都会の駅とかよく考えてみろよ…。目の前の案内板にどっちなね

行くか書いてあったって一発じゃ絶対わからねぇ……！
決して私がポンコツなわけではない、はず…!!
スクエア型のバックパックを揺らしながら走る事しばらく。
高台にある雄英高校に到着。いや、いいトレーニングだわ。
どこを歩くにもこの建物は規格外だ。敷地もデカけりゃ教室のドアもデカい。
家に送られてきていた案内に従って辿り着いた教室も定員に比べればずいぶん大きいだろう。
中にはまだ誰もいなかった。自分の席を探して荷物を置くともうする事がない。早く出発したくせに結局スムーズに来れてしまったせいで暇になってしまった。
校内探索でもするか……。

簡易な校内地図を片手にフラフラ歩いて回り、そろそろ頃合いかと教室に戻れば。

「……！……机の製作者方に申し訳ないと思わないか!?」
「思わねーよてめーどこ中だよ端役が！」

なんだこの馬鹿うるせえ連中は。
クソ程ガラが悪い奴と神経質そうな眼鏡がガンつけ合っていやがる。
ドアをスライドさせた体勢のまま顔が思い切り歪んでも仕方ない事だと思うのだ。
ちょうど私と同時くらいに反対側の出入り口から顔を覗かせた男子に気を取られた眼鏡君を横目に見つつ、関わらんとこ、とさっさと自分の席に向かう。
「流石にソレは初対面の相手に向ける顔じゃないな」

「お、障子。はよ、同じクラスだったんだな。」

新しく教室に入ってきた人間にヒュンヒュン飛んでくる矢のような視線を受けていると、その中から聞き慣れた声が。

現状唯一連絡先を持っている障子目蔵氏である。

お互い合格した事は知っていたがクラスの事までは知らなかった。正直知り合いがいてホッとした。コミュ障の心強い味方だぜ…！

障子の言葉に、だって初日から騒音被害がでるぜと返すとマスクの下でコッソリ笑っていた。

「……ねぇ」

ついつい障子の近くまで来ていたら、今度は横から声が、って耳郎さんじゃん⁇障子の後ろか。うらやましょうじ。

「入試の時に助けて貰ったんだけど、覚えてる？」

「もちろん」

「マジで？よかったー…」

なんかめちゃホッとされてるけど忘れてませんよ。連絡先の交換は忘れたけど！

今度は忘れないうちにと、片手を差し出す。

「改めて。これからよろしく、耳郎さん」

「好きなように呼んでよ、コッチこそヨロシク」

握り返された手が柔らかくてじんわりあたたかい。これが女子…！

ほっぺたが緩んでだらしない顔になってるだろうなぁ私。

にへにへしているとチャイムが鳴った。

「お友達ごっこしたいなら他所へ行け」

デカい芋虫がいると思ったら相澤さんだった。

センセー、立場的にそのアングル大丈夫なんです？

＊＊＊＊＊＊＊

「個性把握…テストォ!?」

「ヒーローになるならそんな悠長な行事出る時間ないよ」

ミノムシ澤さんが寝袋から取り出したる体操服を着て、グラウンドなーう。

あれ、入学式は??

何やら公式イベントを放り出して緊急イベントが始まるらしい。

ちょいちょい思ってたけど、相澤さんって合理主義を詰め過ぎてぶっ飛んでるとこあるよな。

「雄英は〝自由〟な校風が売り文句。そしてそれは〝先生側〟もまた然り」

まあ確かに。センセーの言ってる事も間違っちゃない。

「ソフトボール投げ、立ち幅とび、５０ｍ走、持久走、握力、反復横とび、上体起こし、長座体前屈。中学の頃からやってるだろ？〝個性〟禁止の体力テスト。国は未だ画一的な記録を取って平均を作り続けてる合理的じゃない。まぁ文部科学省の怠慢だよ」

これだけ超常が日常と化した社会。

見た目じゃわからない個性も周りと異なる姿と形を持った個性もいるのに、平均的な記録を取って何になる？
全の中で飛び抜けて強い一がいるのなら、その上で取った平均なんざ意味を為すわけがない。

「爆豪。中学の時ソフトボール投げ何ｍだった」
「６７ｍ」
「じゃあ個性を使ってやってみろ。円から出なきゃ何してもいい、早よ」

教室で騒いでいた騒音野郎が石灰で描かれた円の中に立つ。
急かされるままに振りかぶられたボールは爆音に弾き飛ばされてあっという間に見えなくなった。
「死ねえ!!!」……死ね???
「まず自分の「最大限」を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

どこかに着地したボールから相澤さんの端末に送られた数値は７０５．２ｍ。
「なんだこれ!!すげー面白そう！」
「７０５ｍってマジかよ」
「〝個性〟思いっきり使えるんだ!!さすがヒーロー科!!」

一気に沸き立つクラスの様子を眺めていると。
ヒヤリと。こちらを見遣っていた気だるげな視線から温度が消えて空気が冷える。
ああ、怒ってるなぁ。
「…面白そう、か。」

「ヒーローになる為の3年間、そんな腹づもりで過ごす気でいるのかい？」

ピリついた気配に気付いた周囲がザワザワと揺れる。

「よし。トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し除籍処分としよう」

「はあああ!?」

「生徒の如何は先生の〝自由〟。ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ」

あまりにも自由。でもそれだからこそ、って感じだな。

こんな理不尽な事をしたって許される、それだけ積み上げられた実績がある学校。これが最難関。

まあでも普通の感性なら受け入れなれないわな。

「最下位除籍って…！入学初日ですよ!?いや初日じゃなくても…理不尽すぎる!!」

「自然災害、大事故、身勝手な敵たち…。いつどこから来るかわからない厄災。日本は理不尽にまみれてる。そういう理不尽を覆していくのがヒーロー」

「放課後マックで談笑したかったならお生憎。これから3年間、雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける。」

「〝Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ〟さ。全力で乗り越えて来い」

山程の苦難を押し付けられても、それをクリアしていくのがヒーローだと言うのなら。

最良の結果を、なんて言えないけれど、自分の限界を飛び越えた研鑽を求められ続けるのだろう。

「先生ー、この体操服どこまで伸びますか？」
「事前の申請でお前の個性に対応してはいるが、コスチュームのオマケ程度の機能だ。誤差の範囲だと思っておけ。」

まじか、コスチュームだけじゃなくて体操服にも考慮してもらえたんか。流石にここまで手を出してもらえるとは思ってなかったんだがなぁ。破れる度に買い直しだと思ってたわ。……女子だからって所も無きにしもあらずか…？

まあ、ある程度は許容範囲と見た。

巨大なのは厳しいと見た方がいいな。初日早々破る前には脱ぎましょーかねー。

そんな事を考えているとじとりと視線が飛んでくる。

倫理観の範囲内でってか。いくら私でも流石に多感な少年少女の前で露出狂になるのは勘弁ですって。

移動しながらそんな問答をしていると若干低めの位置から粘り気のある何とも言えない気配を感じたが、直ぐに最初の測定に移っていったが為に大勢の人波にかき混ぜられて霧散していった。

「爆豪４秒１３、緑谷７秒０２」

均されたトラックの上をそれぞれの個性を存分に披露しながら駆けていく。

ビームに尻尾、テープ、豪快に音を鳴らす俊足、爆発。色んな個性がある上に、今回個性が活用できなかった面子もフツーに足が早い。障子はパワフルだしキョーカはかわいい。…うぬぅん名前呼び慣れなァい！グラウンドに来るまでに２人で考えたけどもによもによする…。

ちなみにキョーカは私の事チカって呼ぶ。ぬぅん…！

最初の競技は５０ｍ走。

色んな個性の使い方の奴がいるけれど、足の個性っぽい眼鏡が今ん

とこ1番速い。3秒台て。抜けるかな？
出席番号としてはラストで奇数だから一人で走る事になる。周りを気にせず自分のペースで走れるのはいい事だ。
そうこう言ってるうちに直ぐに順番が回ってくる。

「次、四葦」

邪魔になる靴を脱ぎ捨ててゆるっと歩いてスタートラインへ。何人かがしていたのに倣ってクラウチングスタートの体勢を取る。
個性の関係上独特なスタイルでスタートする奴もいるけれど、私としては凄く理にかなったスタイルだよ本当。相澤さんに言わせてみれば合理的。
息を整えて、スタート。
一瞬の内蔵が置いていかれるような感覚を知覚した頃にはゴールラインを通り越していた。
行き過ぎた距離をゆるゆると戻ると丸くなった目がいくつもあって、まるで朝の光景の焼き増しのよう。
長い尻尾を揺らしながら障子のゴツい足の横に並ぶ。でっかくていい影だ。

「何秒だった？聞き取れなかった」
「2秒26だ」
「なる。やっぱ50じゃ足りないなぁ」

トップスピードで走るには距離がちょっと足りない。
100mならもっといい結果が出るはずだ。
次の競技へと向いながら考察する。ん、2秒なら眼鏡は越えたな。手を使う競技は置いとくとして、足を使う競技は結果が伸ばせそうだ。

「それより戻らないのか」

「省エネだよ。変身に1番体力取られるからな」

維持には消費しないくせに変身の度にゴッソリ持ってかれるのは何故なのか。完全に自由自在だったなら楽だったものを。

一日にそう何度も変えてられないし、選択肢によっては消費無しにも例外はある。

雪のような毛並みの上に淡い斑が散って小さな足跡のような模様をいくつも作る。目元から垂れ落ちる筋は緩やかなカーブを描いて小作りな顔に濃淡をつけて。

濃い色の服は体の形に沿って無理なく変化し、動きを阻害せずにほっそりとした手足を覆っていた。

移動を始めた集団の流れに乗って途中で散らかしていた靴を回収。

この姿の時は普段よりも感情が剥き出しになりがちな事を知っていて気遣ってくれたのか、人の固まっている場所から少し外れた所を歩く障子の横を、ありがたく思いながら歩いた。

握力で障子がタコ並みの怪力を出し、立ち幅とびでは騒音野郎が宙を舞い。各々個性を活かして頑張っている。

私と言えば。

あんまり個性の使いどころが無くてほぼほぼ素の力でチャレンジしてる状態だ。

入試のアレでやってもいいけど手先を使う作業に関しては現実的じゃないんだよなぁ。毛は滑るし肉球は力加減が難しくて物投げようとして真下に叩きつけたこともある。そもそも消耗率が上がるから嫌だ。

まあでも出来ないとは言ってない。

握力で、素で６０ｋｇ越えた時は男子連中が白目向いてたな。誰だゴリラって言った奴。ゴリラにはなれねーから。

そんなこんなで。

「今確かに使おうって…」

てんてんと。
遠いけれど、まだ目に見える場所に着地したボールが数度弾んで転がった。
多分使いたかった個性が発動しなかったんだろう。深緑色のボリュームある髪をした男子の愕然とした様子が後ろから見ていてもわかる。確か今までの競技ではあまり活躍できていなかったようだから焦っていたのだろうか。
けど。
この個性の使用不可能状態。これを私はよく知っていた。

「個性を消した」

ブワリと浮き上がった髪と細布が覆い隠していた物を曝け出して。中から現れた黄色いゴーグルがその存在を主張する。

「つくづくあの入試は…合理性に欠くよ。お前のような奴も入学できてしまう」
「消した…!!あのゴーグル…、そうか……!抹消ヒーローイレイザーヘッド!!!」

抹消ヒーローイレイザーヘッド。相澤さんのヒーロー名。抹消と付くだけあって視ただけで人の個性を抹消する。基本的には発動するタイプの個性を消してくるから、一応そのタイプに入る私はたまに見てもらった手合わせで大変苦労した。
深緑の彼がこの場面で個性を消されたと言うのなら、何か相澤さんの琴線に引っかかるような所があったんだろう。最下位除籍なんて言ってたから彼は危ないかもしれない。基本的に相澤さんは有言実行の人だからやると言ったらやる。
首元の布ーー捕縛布に絡め取られて一対一でオハナシアイをしていたが、相澤さんが個性の発動を止めた事で話は終わったようだっ

た。
２回挑戦出来るうちの残り1回。
円の中で何事かを呟く彼はあの合理主義の権化のような人を納得させられるのか。
大きく腕を振りかぶって指先で押し出されたボールが一度目よりも遠く遠くへと飛んでいくのを見て、静かに瞼をおろして視界を遮断した。
あれからちょいちょいトラブルがありつつも全ての競技を回って測定終了。自分の分くらいしかちゃんと記録を聞いてなかったけどどうだろう。いくつかは上位を取れてた気がするが。
「んじゃパパっと結果発表。トータルは単純に各種目を評点を合計した数だ。口頭で説明すんのは時間の無駄なので一括開示する」
「ちなみに除籍はウソな」
端末を操作して空中に画面を表示させた相澤さんがそんな事を宣う。
「君らの最大限を引き出す合理的虚偽」
大ブーイングである。そりゃそうだ。
持久走で首位争いをしたすごいポニテの女の子は「あんなのウソに決まってるじゃない…」と呆れているが、イイエ。アノ人はヤリマス。
合理的虚偽とか言ってるけど本気になったら合理的虚偽こそが虚偽だから。んっん虚偽虚偽詐欺。
ぼんやり順位表を見ていると相澤さんからの呼び出しが。
「体操服のままでいいから後で職員室に来い。話がある」
やべ。使える能力全部使わなかったの怒られんのか？でも順位は

2位だったから結果は出してるぞ…？体操服でって所が気になるな。
とりあえず、と障子とキョーカに断りを入れてからグラウンドを後にした。

＊＊＊＊＊＊

更衣室の荷物は少し気になったがどうせ後で戻るかと放置して、いざ職員室。

「失礼しまーす、相澤さんいらっしゃいますかー？」

あっ。しくじった。
ガラリとスライドさせたドアの向こう側の視線が一気にこちらへ吸い寄せられたのを察知した。
いくら関わりがある人でもここでは先生だ。そんな人に「～さん」だなんて気軽に声を掛ける生徒は特殊過ぎる。現に向こうからやってくる相澤さんからジットリ重たい空気が流れてきてる。

「四葦。此処ではその呼び方は止めろ」
「すみません」

モサっと垂れ下がった前髪の下からの圧。やっぱ相澤さんは怖ーや。以後気をつけねーと。
ところで今日は何用で。

「コスチュームの試着だ。お前の個性は特殊だから使用前に一度不具合が無いか確認しろ」

そっちに多目的室がある。着替えてこい、早よ。とアタッシュケー

スのようなデカイケースを渡されて事務所から追い出された。
閉められたドアの向こう側がなんだかゴチャゴチャ揉めてる気するが、まあ、いいか。
それよりも多目的室を探そうと辺りを見回すと案外近くに目的地。
中に滑り込んで念の為鍵をかけて。
ケースの中から取り出したコスチュームと一緒に入っていた明細書のような紙を手元と見合わせながら手早く着替えていく。
全て身に着け終わるとグッと体を伸ばして動くのに支障がないかを確かめた。うん、いい感じだ。
置いてあった長机を動かして広めに場所を作り、剥き出しの足で床を踏みながら型の動きをなぞっていく。
空手なんかで言う〝型〟と呼ばれる演武からすれば鍛錬を繰り返す中であまりにも我流になり過ぎたそれは、武術の形を残しながらも獣じみていて、私にとってはとても身に馴染む。
たっぷりと生地を使った所謂カンフーパンツと呼ばれるズボンは足の動きを妨げずに可動域を広げ、可能な限り余分な布を排除したのか肋の中程までのノースリーブの上着は薄い生地でありながらもしっかりと体に沿い動きをサポートする。セパレートになった袖は指先よりも長く、腕の動きに合わせて美しく翻り、下に行くほど淡くなる橡（つるばみ）色の生地に鮮やかな紅で刺繍された大振りの花模様が踊っていた。足元から咲く椿のような花の群れを掻き分けて這い上がる龍は背景が暗色であることも相まって夜空を登っていくようにも見えた。
ひと通り動きを流して軽く息を整える。
コスチュームの着心地は抜群だった。もたついて邪魔になりそうな遊びのあるズボンや袖も捌きやすい。変身のせいで靴を消耗品にしてしまう足元は甲掛やアンクルガードのように保護用のパーツが当ててあって、腰のベルトに着けられていたポーチの中に念の為にと折り畳んだ予備の靴が入っていた。衣装に合わせた華やかなそれはほとんど使う事はなさそうだが、その気遣いがありがたい。
次は本命の変身をやるかと思った時。

鍵を掛けた入り口の方からノックの音が響く。
相澤先生かとドアを開けに行けば微かに香る甘い匂い。どこか眠気を誘うようなこの匂いは何だったか…。兎に角相澤さんじゃないな。

「相澤先生の代わりに様子を見にきたわよ！」

派手な登場をかましてくれたのはセクシーダイナマイト美女。際どい衣装に身を包んだ彼女は教育上こんな所にいてもよろしいのか。
聞けば試着後の様子を見るのは同性の方がいいかと思ってとのこと。別にいいんだが。
ああでも相澤さんも、私が何かしら失敗した時に不本意な物を見るかもしれないリスクが下がったから良かったのか…？
まあ、しょうがないかと妥協して。
二三言、今から試すことをセクシー美女と打ち合わせ、持っていた端末を手渡す。ここには鏡はないから、動画を録ってもらってキチンと機能が動くのかを確かめよう。
仕切り直して。ポコンと鳴った録画開始の音を聞きながら変形していく骨格に合わせて背中を丸めていく。あまり変化の激しいのものは対応しきれないかもしれないのだから、まずは体格が近しいものから。
一瞬で可能なものを記録の為に引き伸ばしてもわずか数秒にも満たない時間の中。低くなる視線をそのまま下に落とせば長かった袖の表面が洒落たコートのファーのように毛羽立っていき、瞬きの間に爪を備えた獣の前脚に変わった。
ふるりと耳を揺らして首を回せば腕と同化した袖と同じように強く色味を主張していたコスチュームが消え、白一色の毛並みが白色光に照らされて波のように揺れる。無駄無く絞まった胴体の後ろに感情に合わせて揺れる太い尻尾が見えた。本来灰色がかる色味が白に染められているのはいつもの事だが。
……ヤベェなコスチューム。ここまでできるのか。

辺りを見渡しても何処かの部品が落ちた様子はない。その場で跳んで見てもいつものような服がもたついたり窮屈になったりする不快感もない。すごい、なんだこれ…!!

というか技術局おかしいだろ!?サンプルに髪を提供したとはいえ、トンデモ技術過ぎる!!

ケースの所まで行って中身を漁れば最初の紙の他にもう一枚。曰く、防御力は紙だが、耳に装着するカフスで細胞の変化や脳波等を感知し、提供した髪の細胞を元にした生地が連動して変化しサポートする、だと……?チョットナニイッテルカワカンネーデスネ……。

「……着心地はどうかしら?」

「、……ウォフ」

テンションがブチ上がって宇宙猫になった結果、人語を忘れた。

ハッと振り返った先には撮影中の端末。これは確実に間抜けな顔が映ってるな…。つーか先生、声が震えてやがりますよ。

「んん、どうですか。どこか衣装が残ってる部分はないですか」

「バッチリ消えてるわよ!イイ感じね」

「ありがとうございます」

この姿でも喋れる事に驚いているような先生はスルーして、今度は床に着けていた前脚を浮かせ伸び上がるように体を起こしていく。今の姿は生物の進化の過程を早送りにしたような奇妙なものになっているのだろう。息を飲み込む音が聞こえた。

毛皮と同化していた布地が元の質感を取り戻した時点で変化を止める。

獣に服を着せてそのまま立ち上がらせ、ほんの少し人間に近付けたらこんな姿になるのだろうか。顔は獣そのままに、手先を使えるようにしっかりと長い指を持ち合わせたバケモノ。

稽古を重ねる中でできた最適解。嫌いじゃないが、子どもは泣いて

しまいそうな見た目をしている。
ああ、コレが1番堪えるなぁ。人と獣の姿を行き来する変身を途中で無理矢理に止めているようなものだから、変身には掛からないはずのコストの消費で体力がゴリゴリ削られていく。
だが、1番出力が高いのがこれなのだから使わない手はない。なんてったって通常の約3倍のパワーが出る。もう少し調整して顔や骨格をほとんど人間寄りに調整してしまえば対人的にはやわらかくなるが、出力の倍率が2倍まで落ちるのだ。消耗も軽減されるけどここぞという時の力が足りない。
これを実践で使いこなせなければ意味がない。
人と獣の姿では継続した消耗がない代わりに倍率はかかってくれないのだから、正に一長一短だ。
そうしてしばらく調整を続けて不備がないのを確認し。
きっちり動画を録ってくれたセクシー美女にお礼を告げてケースに仕舞ったコスチュームを返却した。
相澤先生には問題無しの報告をしておいて下さるそうだ。もう一度お世話になったお礼を言えば、ニッコリ笑って手を振ってくれた。

更衣室を経由して教室まで戻ればクラスメイトの姿はない。測定が終わってから1時間も経てば当然か。
嗅ぎ慣れない匂いが残る室内を横切って自分の机まで戻れば、控えめに存在を主張する紙の切れ端が乗っていた。コスチュームの調整で疲れた体を机にぺたりと預けれると動いた空気に押されて小さな紙が踊る。
〝また明日〟と当たり前に書かれた文字に、何だか体がもぞもぞとむず痒くて組んだ腕に顔をうずめた。

いつの間にやら日は傾いて。あのまま寝落ちていた間抜けな奴の、相澤さんにぶっ叩かれてできたたんこぶはそこそこデカかったとだけ言っておこうか。
痛む頭を摩りながら出口へ向かう途中。

開いた扉から吹いた風がどこかで嗅いだ懐かしい匂いを纏って鼻先を撫でていった。